
Training Box

日奈久 夕花子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T r a i n i n g B o x

【Nコード】

N 0 3 5 6 Z

【作者名】

日奈久 夕花子

【あらすじ】

ファンタジー&恋愛の掌編小説並びに短編小説置き場。ブログにて掲載した作品をこちらに整理しました。お題内は基本同一世界。ただしつながりはある場合とない場合がございます。リハビリとしての習作作品となりますので、ご了承くださいませ。また、。5題という章タイトルから想像する中身と異なる場合もございますので、ご注意ください。各話のタイトルには沿うようにしております。が、努力がからまわることもありますのでご了承ください。20日まで毎日更新予定。（サイト名：「確かに恋だった」様 [http:](http://)

/ / h a v e - a - c h e w : j p / よりお題をお借りしております

1・賭博好きのお姫さま

フィノルディアの第二王女は、それはそれは美しい。

いまだ成人前ゆえに、結うことのないその髪は日に透けて輝き、ほつそりとした面にいたずらな目が若草の色に輝いている。

フィノルディアの第二王女は、それはそれは愛されている。

王と王妃はもちろんのこと、側妃たちの評判も悪くなく、兄弟仲も悪くない。

むしろ、両親たる王と王妃と、側妃と子である兄弟たちには溺愛されているといってもいい。

幸せで素晴らしい、フィノルディアの第二王女。

だけど。

だけどひとつだけ。

彼女は秘密を持っている。

この国の、王女の最大の秘密。

「この前の試合の結果は、どうなりました？」

傍らに控える無二の侍女に、王女の柔らかな声がかかる。

「ええ、下馬評通り……と申したいところですが、大番狂わせができましたわ」

「まあ！ では、今度も、わたくしの勝ちね」

手に持った扇で口元を隠しながら、ころころと鈴を転がすような声で笑う王女。

「……さすがですわ。姫様」

うつとりと微笑む、侍女の姿。

フィノルディアの第二王女は、とても美しく愛されている。

けれど、両親も皆も、誰も知らない秘密。

彼女の個人資産が、実は途方もないものになっている、ということ。

——彼女が、とても賭博好きだ、ということ。

彼女の特技は変装で、時折城下に降りては少々いかがわしい場所で、賭け事を繰り返している、とか。

その付近ではさり気に姉御と呼ばれている、とか。

誰もだあれも、知らない秘密。

「……さあ、この国での最後で最大の賭けが、もうすぐはじまるわ」
成人の日まであと少し。

間もなく決定する嫁ぎ先を思って、扇の陰でニヤリとどこか妖艶な
笑みをこぼす姫なのだった。

f i n

2・元騎士様、求職中

品行方正にして質実剛健、誠実なるものであれ。

そんなものくそつくらえ、とばかりに投げ出して、自由に生きてやるぜ！ と、騎士をやめたのはもうどのくらい前になることが。

「……若かった、なー」

断られた店先、深くため息を漏らしながら、男は項垂れた。

最初はよかった。それなりに蓄えもあったし、自由になった身が嬉しいばかりで。

飲んで遊んで、その日暮らしの日々。

軽いけがで、まあ、そりゃ、頑張れば前の通りに働けないこともなかっただろうが、これ幸いと騎士をやめて。

心配する両親には、大丈夫です、またやり直します、なんて、いい顔みせて。

しかし、時間がたつにつれて、両親は渋い顔に。

ためた金使い果たしたあたりから、仕事もしないで遊び歩く男に、周囲は厳しくなってきた。

世の中、金、かー？ 権力かー？

貧乏子爵家に、男を遊び惚けさせる余裕はなかったようだ。

「あー……仕事おちてねえかなあ」

いつそ傭兵にでも思ったが、けがのあと真面目に鍛錬しなかったために変な癖がついてしまった。

ならば力仕事か、と、思ったが、怠けた体は重くすぐに息が切れる。

若かったなあ、と、しみじみ空をみあげてつぶやいて。

のそのそと、宿へと戻る。

実家を追い出されて、日雇いの仕事で乗り切って。

……このまま、うらぶれて、俺は昔騎士だったんだぜー、なんて、よっぽらってつぶやくようになるんだろうか。

それがあまりにありありと想像できて、男はぶるりと身震いをするのだった。

f i n

3・王子様はノイローゼ

「……僕はなぜここにいるんだろう」

王城の豪華な執務室で、書類を片手に、一人の少年がぼんやりと窓の外を眺めながら呟いた。

少年は身なりから、身分が高いことが察せられる。それもそのはず、この国の王太子として若干15歳ながらも執務の一部を担っていた。

「ああ、鳥だ……空を飛べたら自由になれるかなあ……あはははは」

しかし、覇気がない。茫洋と窓の外を眺め、まるで棒読みでつぶやく。

「……執務中ですよ」

傍らに控えていた侍従が、遠慮がちに声をかける。が、聞こえないのか振り向きもしない。

「ああ……遠くにいきたいなあ。海の方この新大陸にでもいきたい。もう、もういいじゃないか、もうさ、やりたいっていうなら、ぜーんぶ、譲るからさ、もう、ほっといってくれよってね」

無表情のまま、窓の外を眺めつつ、つぶやき続ける少年。

と。

がしゃーんと窓が割れて、黒ずくめの装束の男が飛び込んでいた。

「お命頂戴仕る！」

「殿下！」

そのまま襲い掛かる男に、侍従が王子を守るように飛び出し、控えていた騎士たちも臨戦態勢となる。

きん！ と、男の攻撃がはじかれ、緊迫した空気の中、騎士と男が切り結ぶ。

「あ……」

ぽつり、と。そんな中王子が声を漏らす。

「あああああもう！ そんなに俺が王太子やってんのいやなんだ
ったら、やめてやる！ やめてやるよちきしょー！！」

ばん！！ と、机をひっくり返しそうな勢いで、王子が叫ぶ。

「で、殿下、何を！！」

「だってそうだろうよ！ ロクに仕事を手伝うわけでもないのに王
になりたいとかいいながら俺を狙ってくる弟どもも、ロクに政治の
あれこれもなんもわからん上に浪費だけは激しい弟どもの母親ども
も、もうもう、勝手にしろってんだ！ 好きに勝手にやればいい、
俺はもう知らん。もうもう、もう知らん！ 父上が大変だからと手
伝ってはいたが、その父上だって馬鹿な子ほどこわいいんだかなん
だかしらんが弟どもをかばいやがるし、そのうえその馬鹿な母親た

ちも、惚れてんだかなんだかしらんが放置しやがる。この国、ぎりぎりだぞ？ 経済状態ぎりぎりなんだぞ？ それをおつまえ、仕事もしねーで金ばつか使っておいて、王位継承の儀が近いからってここまでざかざか暗殺者やら毒やら仕込まれたんじゃ、俺やってられねえって！ 国のため、民のためって思っでここまでやってきたけど、もう限界。もう無理。もう勘弁。生まれた時から命狙われてたけど、10超えてからは仕事手伝いながら頑張ってきたけど、もう、限界。俺、出てく。絶対この国でってやる！」

一気にそれだけ告げると、机の上の書類をなぎ倒し、部屋から出ていく。

「っ、で、殿下ああ?!」

足音高くその場を去る王子の姿に、室内は一瞬茫然としたが、あわてて騎士の一部と侍従が後を追う。

残されたのは騎士と相対していた暗殺者のみ。

気まずい沈黙が続く。

そつと視線を逸らした暗殺者は、静かに剣を引くと、頭をかいだ。

「まあ、なんだ……うん、なんか悪かったな」

なんとも言い難い暗殺者の男の言葉に、騎士も剣を引きつつ、なんともいえない表情を返す。

「……まあ、まだ殿下も若いからな。しかし、あそこまでとは……」

殿下、ご乱心。

はたしてこの国がこれからどうなっていくのか、不安に襲われる騎士と暗殺者だった。

f i n

4・民間資格の魔法使い

小さいころ、約束したの。

きつと、きつと迎えに来るって。

「りーふぁ、まってね。きつとつよくなって、むかえにくるから」
遠く離れた処に引っ越していく彼を、見送るしかなかったあの頃。
いつかきつと、また会えるって。むかえに来てくれるって、信じてた。

——けれど。

「……まってられなかったの、来ちゃいましたっ」

てへ、と笑いながら首をかしげて見せれば、彼は茫然と、ずれたメガネを元に戻して。

「ど、どちらさまですか？」

どうやら、10年もたったがゆえに、彼は私のことを忘れたみたいです。

「ひ、ひどい……っ、約束を忘れるなんてっ。むかえに来てくれる
っていったのに！ 強い魔法使いになって、そしてむかえにきてく
れるって！ 王都で頑張って宮廷魔術師してるってきいたから、私
も魔法勉強しながらまっていたのに！ なかなか来てくれないから、
ここまでいたのに！ ひどいいいいい」

「え、ええええ？ ええと、ちいさいころ？ え、あ、もしかして、
リーファですか？ となりに住んでいた、いじめっ子の」

「え？」

「え？」

「い、いじめてないよ？ 酷い！」

「いやだって、ほら、嫌がるのに虫を押し付けたり、嫌いだってい
ってるのにココルの実を食べさせたりしたじゃないですか」

「え、泣いて喜んでたんじゃ………？」

「そんなわけないでしょう！」

「がーん、ショック………」

「いや、どうしてそこでショック受けられるのかわかりませんが
……まあ、お久しぶりです。綺麗になりましたねえ」

「う、うわあ、王都にいったあなたってば、女たらしになったの？
なったの？」

「ちょ、社交辞令をそういう風にとられても」

「社交辞令って！！ 最低っ」

「ああああ、とりあえず、落ち着きましょう。ここまではどうやって？ 遠かったでしょうに」

不思議そうな彼に、胸を張って答えますとも。

「魔法の勉強をして、資格をとったの。で、さっそく王都まで飛んでみました」

きやるん と、首から下げていた資格証を見せれば、驚いたように彼は瞬いて、それから食い入るように資格証を見始めます。いやん、胸元を凝視だわ。

「転移魔法ですか……？！ しかもその資格証、国の発行する魔術師資格とは違うようですね。なに、『地方連合協議会認定魔術師』？ なんです、これ、地方団体ですか？」

ぷるぷると首を振ります。

「なんか、民間の有志の方々が立ち上げた団体でー、なんと一日5分の練習で魔法が使えちゃう！っていう、通信教育だよー。遠見の水晶で先生のチェックもばっちり！ これで私も魔法使いになれましたー」

「……え。なんですか、それ。人が魔法学園に必死で勉強して合格し、さらに学校で鍛えられ、やっとの思いで宮廷魔術師になって、そこまで来て転移魔法が使えるようになったというのに」

「え。1か月くらいで使えるようになったよ、この講座だと」

がつくりと項垂れる彼のそばによって、肩をぽんぽん。

「まあまあ。とりあえず、今夜とめてね？」

はっと振り返った彼に、にっこり。

せつかく、資格まで取って会いにきたんだもの。

もう逃がさないんだからっ。

彼の運命を知る者は、誰もいない。

余談。

かの民間資格、実は立ち上げたも現在講師をしているのも、実力はあれども人に仕えるのメンドイとばかりに引きこもったり自由に生きてたりした超優秀な魔術師たちが、遊び半分で立ち上げたものだったとさ。

f i n

5・召使いは時給制

「それでは主さま、今日はここで失礼いたします」

就業時間を終えて、ふわりとお仕着せのメイド服のスカートを揺らしながら礼をする。

深く腰を折りながらも、バランスは崩さない。これって匠の技だね。

ゆつくりとそのまま体を元に戻せば、部屋の中、中央に置かれた力ウチにしどけなく腰かけた、風呂上りらしき艶やかな濡れ髪の主様^{あめじ}先ほど届けたワインを片手に、じっとこちらをご覧になっておられます。

あらやだ、色気がただもれでしてよ？

「もう帰るのか。どうだ、一杯飲んでいかないか」

まあ素敵なお提案。主様が飲まれるワイン、とてもいいものが多いのですよね。こちらに来てから、私ったらアルコールに強くなったみたいで。おいしいお酒をおいしく飲めるようになったのよね。じゅるり、と内心はよだれぬぐいっつも、必殺メイドの微笑み！

「とんでもないことでございます。一介の侍女風情がそのようなどうかお許しくださいませ」

そそと告げてみたならば、どこかまずいものでも召し上がったようなお顔の主様。まあ、失礼な。

「今更何を言う。ならばなんだ、仕事でなければいいのか？」

「いえ、お断りいたします。仕事としてでしたら、お付き合いさせていただきますけれど」

「……どつちだ。まあいい、座れ」

「失礼いたします」

身のこなしは丁寧に。ゆつくりと邪魔にならないように、カウチのそばへ。

ぼんぼん、って、そこお隣ではありませんか？ 座れと？ そこに座れと。

にやにやしないでくださいな、主様。エロおやじくさいです。いいませんけど。

しょうがないので腰をおろし。勧められるままに一杯二杯。あらおいしい。

窓の外は綺麗な月夜。これはいい月見ワイン。なんかゴロが悪いですね。

静かにかけられる声に、静かにお応えして。程よく飲み終わったところで、そろそろお開き。

「しかし……かなり飲んだらうに、崩れないな、お前」

どこか悔しそうな主様。そこそお酒がまわったのか、色づく頬に濡れた唇、あら、目まで潤んで。これはまた、美形だけに目の保養ですね。

「ええ、それが取柄でございます。では、今日はこれにて」

礼を取って、からのデキャンタとグラスを載せたワゴンと共に、退室します。

あ、そうそう、忘れるところでした。

出口のところどころでくり、振り返って。

「主様、本日、6時間の残業となります。夜間でもありますので割増しで、請求させていただきますので、よろしくお願いいたしますね。それでは」

はじけるような笑顔でにつこりと。そう告げると、今度こそ、静かに礼をしながら部屋を後にしたのでした。

ふっふっふ、お給料、時給制にしていたよかったー。

f i n

1・恋愛ごっこなら余所でやりなさい

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

——それなのに。

「恋愛ごっこなら余所でやりなさい」

深いため息と共に、じっとこちらを見つめる目は、呆れたような色で。

仕事の手を止めさせてしまった私を、どこか非難しているようで。

「……だって」

「でももだってもありません。私は、締切前なんです。忙しいんです。遊びに付き合ってる暇はありません」

さっさと帰りなさい、と、そう短く告げられて。

そのままパソコンへと再び視線を落とす彼。

「あ……の……」

恐る恐るかけた声すら、もう届かないほど集中していて。

それ以上声をかけることなんか、できなくて。

しばらく、じっと見つめていたけれど、私のほうを見てくれること
なんか、なくて。

悲しくて。痛くて。つらくて。

私は、そっと、部屋を後にした。

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

ただ、彼しかいなかった。

幼い恋。小さなころに刷り込まれた、あこがれのお兄ちゃんは、今
や作家先生。

隣同士、幼馴染。年の差はいかんともしがたいけれど、隣のおばさ
んがかわいがってくれたから、彼の仕事場の家事のお手伝いをする、
と、高校に上がってから許可をもらった。

本人が知らなかったなんて。それこそ、私が知らなかった。

——そして。

いつものように、甘えた私を。

仕事中の彼は、取り合ってくれなくて。なんだかさみしくて悔しく

て。仕事から自分に視線を向けてほしくて、つい、言葉がこぼれた。
好きって。

いうつもり、なかったのに。

言っただって駄目だって、わかってたはずなのに。

返された言葉は、冷たくて。どこまでも、冷たくて。

気が付けば、ほろほろ、涙がこぼれた。

ずっと懂れていた。

それが本当の恋かどうかなんて、どうでもよかった。

恋愛ごっこ、だなんて。

——この思いが、錯覚かどうか、なんて。

彼にだって、断言される筋合い、ないのに。

遊びだなんて。ごっこだなんて。そこまで言われる筋合いなんて、
ないのに。

夕暮れの街は、紅に染まる。

じっと、空を睨み付ける。悔しい。悔しい。悔しい。——悲しい。

長く伸びる影を眺めながら、ひとり、静かに泣いた。

2 子どもはもう寝る時間です

帰りたくなかった。

家にまっすぐ、帰りたくなかった。

だって、隣は彼の家。お兄ちゃんの家。

仕事場にこもることの多い彼が、いつもいるわけじゃないけれど。なんだか、家に帰りたくなかった。

放課後。

昨日まではクラスメイトと、あちこちに出かけたり、友達の家にお泊り会したりして。

高校までずっと一緒だった友人たちは、その親とも仲良しだったりするから、結構気軽に家にちゃんと連絡さえすればお泊り可だったり、連絡入れればある程度遅くまでオッケー、だったりして。

夜遊び、ってほどじゃないけれど、いつもより帰りが遅くなった。

お母さんは心配してはいたけれど、お兄ちゃんのところから帰ってから変だ、ってわかってたみたいで、何も聞かないでくれた。お父さんにもなんとかごまかしてくれてるみたいで。正直、知られてるって怖さはあったけど、でも、ありがたかった。

さすがに今日は、友達たちも用事があるようで、ひとりぼっち。

今までなら、泊まらないまでも、友達とワイワイ過ごすことで気持ち紛れるし、そのまま帰宅すればその気持ちを持續できるし、で、なんとかのりきってきたけど。

ぽつん、と、一人になると、余計なことを考えてしまう。

嫌われた、という気持ちとか。お兄ちゃんがそんなことで嫌うはずない、という願望とか。年が離れた人を、なぜあんなに好きになったのかな、とか。——もう、会えないかな、とか。

会えないのか、会いたいのか、会いたくないのか。ぐるぐる回る気持ちは複雑で、なかなかこたえがでてこない。考えすぎて熱が出そう。ため息を漏らしながら、それでもまっすぐ帰る気持ちになれなくて、公園へ足を向けた。

小学生たちがきゃいきゃいと遊ぶ公園。昔、私もお兄ちゃんに遊んでもらったなあ、なんて、思い出す。

よほど小さい時から、私はお兄ちゃんが、彼が好きだったみたいで、足元がおぼつかない時から見つけると駆け寄るような子供だったらしい。おぼろげな記憶の中でも、まだ幼児の私が小学校高学年だから中学生だかのお兄ちゃんに駆け寄っては、遊んでもらおうとしている場面が浮かぶ。

……考えたら、すんごい迷惑な子だったんだね、と。

今更ながらに気が付いて、恥ずかしくて身悶えしてしまう。

——でも。それでも、好きなんだよなあ。

なんで、と言われても困るけれど。

そんな風に迷惑な子供だったし、時々、めんどくさそうに困ったように、したけれど。

……遊んでくれたんだよな、子供と。ほつとけよー、なんていう同級生の言葉に、ごめんな、なんてこたえて。つまらなかつたろうに幼児である私の相手を、しょうがないなあなんて顔で笑いながらしてくれて。

甘やかされてた。構ってもらってた。

——それが当然、と、思ってしまうようになるくらいに。

ため息が漏れる。あーあ。自業自得とはいえ、つらいなあ。もう少し、もう少し、大人になつてから、いうつもりだったのに。好きです、って。だから頑張つてここまで立派になりました、って。あーあ。

夕暮れの公園は、日が落ちて、子供の数も減っていく。少し肌寒い気がしてぷるり、と、体を震わせたら。

近くで、呆れたようなため息が聞こえた。

ばっ、とそちらを見れば、彼の姿。え。なんで？ どうして？ と軽くベンチでプチパニックを起こしていると、少しばかり呆れたような声で、彼が言う。

「何をしてるんですか。バカ娘。遅くまでこんなところで。夜遊びのつもりですか」

「え……なんで？」

「なんで、も、ないでしょう。連絡してないんじゃないですか？いつもの時間に連絡がないのに帰ってこない、と、おばさん心配してましたよ。まったく……どこにいるのかとおもったら」

言われてみれば、今日はそこまで遅くなるつもりはなかったの、連絡はしてなかった。あわてて携帯を取り出して時間を確認。うわ、19時過ぎてる。まだ19時、ともいえるけど、私にしてみれば連

絡なしで帰らない時間ではない。

さらに、着信が複数。確認すれば母と……そして、彼からの、着信。視線を挙げれば、ふう、と、深くため息をついた彼。よく見れば少し汗ばんでるような気がする。——探してくれたの？ 私のこと、うっとおしかったんじゃないの？ それでも、探してくれたんだ。

「う、めんなさ……」

「全くです。この公園、遅くなると変質者出るって知ってるでしょう。さあ、帰りますよ」

ぐい、と腕をつかまれて、立ち上がられる。ぐいぐい。引っ張られるように公園を出る。強い力。でも、転ばないように気を付けてくれる。昔からこうだった。強くて強引なようで、優しい。

——優しくされたら、諦めきれないよ。

目に涙がたまっていく。何かの拍子にこぼれそうになりながら、家の前について。

「まったく。文筆家なんですからね、運動なんてできないもやしなんですか……ら……」

ぼやきながら振り返った彼が、言葉に詰まる。

ああ、涙。隠せなかった。

ぽろり、と、一滴。ほほを伝ってこぼれていった。

沈黙。何も言えなくて。ただ二人で立ち尽くして。

どうしよう、と、思っていたら、視界に指が見えた。彼の手。少しごつごつして、ペンだこのある手。それが、ずっと私のほうに伸びてきて。こぼれた涙を救うように、そつとほほと目じりをなぞるように。

触れる、熱。

驚いて目を見張れば、はっ、と我に返ったように彼の手が戻される。

なに。いったいなに？

「っ。子どもはもう寝る時間です。さっさと帰りなさい」

そういうと、軽く私の背を押して、家のほうに進ませる。

え、どういうこと？ そのままふらふらと玄関の前まで進んで。扉に手をかけたところで、振り返ったら。

もう、彼はいなくて。

混乱。困惑。パニック。

——20時じゃ、さすがに、寝るにも早い気がするよ、お兄ちゃん。

私は、ちょうど玄関の物音にきづいて出てきた母に声をかけられるまで、そこに立ち尽くしていた。

3・あなたの気持ちはよくわかりました

それから。

不思議なもので、会おうとしなければ、私と彼はこれっぽっちも接点がなかった。

ちようど仕事が詰まっていたのか、実家へ戻ってくるのが少ない彼と、日中は学校の私。

今までなら、会いたくて会いたくて、できるだけ口実を設けて隣に行ったり届け物をしたりと、していたけれど。

それをしなくなった途端、彼と会うことはほとんど、全くと言っていいほど、なくなった。

ちらり、と見かけることがないわけじゃなかったけれど、忙しそうな彼に私から声をかけるなんて、できるわけがなかった。

1週間、2週間。時間が過ぎていく。

会いたいな、という気持ちが湧き上がる反面、彼の冷たい言葉や迷惑かもしれないという思いがストップをかける。

不自然に遅く帰るのをやめたにもかかわらず、これほどまでに彼に会わないということは、彼が会いたくないと思ってる証拠のようにすら思えて。そうしたら、余計身動きできなくなった。

「馬鹿だねえ」

公園で、友達と二人。目の前でカフェオレを音を立てて飲んだ彼女は、ちらりとこちらをみる。

「馬鹿だつてわかつてるよ」

「いいやわかつてないね」

手の中のバックをのむ気に慣れずに、右に左にと手遊びしつつつむけば、彼女のため息。

「ってかき、いい加減ほかの男にも目を向けなつて」

「……そうはいつでも、ねえ」

「あんた、ガード固いんだよ。気になつてるやつ、いないわけじゃないんだ。もつと気楽にいきなよ」

ぶらぶらとベンチから降ろした足を揺らす彼女の、短いスカートが翻る。

少しだけ奔放な彼女。だけど、その言動や外見に比べて、彼女こそガードが堅いのを私は知つてる。

その彼女に、こうもいわれるとは。……少し考えたほうがいいんだろうか。

「んー……考えてみるよ。なんか、うん」

「そうしな」

軽く返して、彼女が笑う。美人だと思う。派手目の美人。だけど、笑うとかわいらしい。

……彼女みたいに大人っぽい外見だったら、もう少し彼は、私を見てくれただろうか。

そんな埒もないことを考えて、また、ため息を漏らした。

「ただいまー……」

扉を開ければ、ふわりといいにおいが漂っていた。

ぐう、と、現金なおながなる。思わずぺちりと一度おなかをたたいてから、ダイニングへと向かう。

「あら、お帰りなさい」

ばたばたと台所で料理をしていたらしき母が、振り返って笑う。

「ただいまー。あー、おなかすいたー。ねえ、ごはんすぐ？」

鍋を覗き込みながら言えば、呆れたようにぺちりと頭をたたかれて。

「ええ、すぐできるから着替えてらっしゃい。ちゃんと手も洗うのよ」

まるで小さな子供に言うように、くすくすと笑いを含めていう母に、はい、と、わざと幼い返事を返して。

ダイニングを出ると、二階の部屋へ。制服を脱ぎながら、ふと窓の外をみれば、隣の家がみえる。庭と、家。そして、あの、見えそうでみえないぎりぎりの場所にある窓が、彼の、お兄ちゃんの部屋。カーテンが閉まったままの様子に、相変わらず忙しいんだろな、と、思っ苦笑する。

結局、彼のことを考えてしまつらしい。

本気で、新しい恋を探したほうがいいのか、なんて。そんな風に思った。

「あ、いいところに。これ、お隣にもって行って」

着替え終えて下に行けば、鍋と回覧板を用意した母がにっこり笑う。

「えー……おなかすいたのに」

「さっさと行く。早く戻ってらっしゃいよ」

「はい」

しゅしゅと、それらを持って家を出る。

窓もしまつてたし、カーテンもしまつてたから不在のはず。おばさんに渡してさっさと帰ろう、と、隣の家チャイムを押せば。

「はい」

「おばさん、回覧板とおすそ分け持って来たー」

「はいはい、ちょっとまってねー」

インターホンから明るい声。つられるように笑顔になる。

しばし待てば、足音。……おばさんにしては焦ったような？ 少し首をかしげていれば、ばたん！ と大きな音がして、玄関があらた。

「あ……」

「……久しぶりですね」

彼、だった。どこか焦ったような様子で、扉を開けた彼。まさかいるとは思あなかったので少し焦る。

「あ、あの、これ。かーさんから。おすそ分けとあと、回覧板！」

ぐい、と、勢いのままに渡して。

「じ、じゃあ。おじゃましました！」

「あ、待ってください」

くるり、と踵を返そうとしたら、引き止められて。

余計にあせる。

「あ、あの、その。うん、今まで迷惑かけてごめんなさい。お兄ちゃん忙しいのに、なんか邪魔ばつかで。うん、だいじょうぶ、私は平気だし、うん。あ、友達にいわれたんだ、新しい恋でもしたらって。がんばってみようかなーっておもうんだ！ だから、うん。いままでありがとうね、お兄ちゃん！」

焦って。言わなくていいことまで、言ったかも、って。気づいたけど。出てしまった言葉は、戻せなくて。

振り返ることもできないまま、立ち尽くしていれば。それまでずっと沈黙していた彼が、深く長い、重たいため息をひとつ、漏らして。

「あなたの気持ちは、よくわかりました。——引き止めて済みませ
ん。おばさんにお礼いっておいってくださいね」

そついうと、しばらくして、ぱたんと玄関の閉じる音。

……ああ。

そのまま、どこか茫然とした足取りで、家まで帰る。

「ただいまー……」

「おかえりな……っ、ちょっと、どうしたの!?!」

リビングに入れば、母が焦ったように駆け寄ってきて。

「え、なに?」

「なに、って。……あなた、気づいてないの?」

どこか痛そうな表情で、そつとほほに触れる母の手。

あ。私、泣いてたんだ。

「……うー」

ごしごし、と、目元をぬぐえば。それ以上何も聞かずに。

「さ。ご飯にしましょ。今日はパパも遅いし、二人で食べるわよ。
あったかいのおなか一杯、食べなさい」

そう、そつと肩を押して、テーブルに促してくれた。

晩御飯は、ちょっとだけ、塩味が効きすぎてゐる気が、した。

4 背伸びをするのはやめなさい

「じ、じゃあ、お試してことで」

目の前で照れたように笑う人に、頷いた。

どこかぎこちない私の笑顔に、隣に付き添っていた親友が、ばん！と背中をたたく。

「いったあ……」

涙目になりながら背中を抑えれば、にやにや笑う親友。

「ま、気楽にいきなよ。な、彼氏候補君も、そうおもつだろ」

「あ、ええ。僕としては、お試しても付き合ってもらえるだけラッキーっていうか！」

真っ赤な顔で、綿綿と言ひ募る少年に、思わず顔がほころぶ。

うん、大丈夫な気がする。お試しだけど。この子となら、やっていけそう。

——ちらりと浮かんだ面影は、見ないふりしてぎゅっと胸の奥で握りつぶした。

つまり、何がどうなったかというと。

あまりにどんよりしていた私の様子に、クールなようで人情家な親

友は、さあはけ、とばかりに問い詰めてきて。答えないわけにもいかないというか……たぶん、私自身が話たかったんだと思う。お兄ちゃんとの会話を、話して。呆れたようにため息をつく親友が、ならば、と、提案したのが。

実際に、お試しおつきあいを試してみしよう大作戦。

長いよ、と突っ込んだら、でこピンされた。ひどい。

まあ、実際お試したいといっても、相手がいなきやどうしようもないよという私に、親友はにやりと笑って。実は紹介してくれっていうの、数件あったんだよねー、と、語尾をハートにはねさせながら、告げてくれた。

驚く私の状態もなんのその、その数名の名前を挙げ、そのうえでお勧め、という少年にその場で電話。お試しおつきあい、という条件に了承を得て。

そしてその日の放課後にご対面。冒頭に戻るわけで。

そんなわけで、生まれて16年。初めて彼氏ができました。仮だけどね。

で、どうしたらいいのかわからない私は、とりあえず、少年と一緒に帰宅することになって。朝も、路線は違うけれど駅で合流できそうだと少年がいうので、そうすることになって。ただ、慣れないからどうしていいかわからなくて、無言のままもくと二人で歩いて。いや、少年は最初一生懸命話しかけようとしてくれたんだけど、も、私がうまく返せなかったっていうか。しょうがないけれど、そんな風な状態で。あれー、私ってこんなに人見知りだったかなあ、

なんて、疑問に思いながらも、一応こう、たまには一緒にお昼を食べたりとか、放課後ちよつとだけ寄り道したりとか。そんな風に彼氏彼女つぼく、それつぼく、過ごしてはいたのだけれど。

……違和感、というか。隣を見て、たまに話が弾んで、顔をみたら、少年で。その瞬間に違う、なんて思ってしまう自分がいて。そのまま黙ってしまう私に、少年は心配してくれるけれど、ごまかすしかできなくて。

少年は、たぶん、本当に私のことを好きでいてくれるんだなって。会話の合間の照れたような仕草やら、声やら、時々たぶん手をつなぎたいのかなって感じで動く手から、感じられて。

少年のことを好きになれたら、最高に幸せになれるんだろうな、なんて。思うのに。

手をつなぐとされたのを、思わず、静かに避けてしまったり。触れようとする手の温もりが怖くて、体を引いてしまったり。

……そんなことを繰り返して、次第に気まづくなり始めた、頃。

「デートしましょう」

そう少年がいうから。思いつめた表情で、まっすぐにいうから。潮時なのかな、と、頷いた。

日曜日。

近くの繁華街で待ち合わせて。二人で、映画を見て。食事でもしようか、と、街を歩いて。

「……おや」

よく知った声が聞こえて、びっくり、と、体が震えた。彼だ。間違うはずがない。こわばった私に、不思議そうに彼は近づいてきて――隣の少年に気づいて。

ぺこり、と会釈する彼に、少年も、訝しそうに会釈を返して。

沈黙。そして。

「……デート、ですか」

ぽつん、と、聞こえた声に、はっと顔を上げると、じつとこちらを見つめる彼の眼があつて。

答えられなくて、どうしよう、って思ってた。ぐ、っと、腕を引かれて。少年がいたんだ、って、振り返ると、どこか真っ直ぐな強い目で、彼を睨むようにみる、少年の姿。

「デートです。失礼します」

ぺこり、と、再び少年は頭を下げると、私を引っ張るように歩き始めて。

「あ、え、ちょ。う、おにいちゃ、またね」

それだけを彼に告げて、引かれるままに少年と共にその場を後にした。

ずんずん、ずんずん。少年は足を止めることなく進む。ついて行くのに必死で息が上がる。やがて少年は、小さな公園へ着くと、やつと私を振り返って。はっ、と我に返ったように手を放すと、申し訳なさそうに眉を下げた。

「ごめん。……勝手なことして」

何も言えずに、首を振る。息が苦しい。

「あの人が、好きなんだね」

はじかれるように顔を上げれば、切なそうな痛そうな表情の少年。

「ご、ごめんなさい。ごめんなさい……っ」

「謝るな！」

大きな声にびくり、と、震える。おびえに気づいて少年は、昂ぶりを抑えるように息をついて。

「……忘れるため、だったんだね。ねえ、僕じゃ、だめ？」

じっと見つめながら。切ない、痛むような目を、向けながら、彼は静かに、静かに言葉を紡いだ。

——こたえなんて、ひとつしか、持ってなかった。

とぼとぼと、家路をたどる。

夕暮れの街は、朱色に染まって。周りの人は忙しそうに歩いている。とぼとぼ、とぼとぼ、と、うつむいて歩いていると、ふと、足元に影が見えた。

視線をす、つとあげれば、目の前に彼。無言で、じっとこちらをみ

ている。

「おにい、ちゃ」

「何をされたんですか？」

「え……？」

「何かされたんじゃないんですか？——そんな、今にも泣きそうな顔して」

すつと伸ばされた手。近づく手。そのままゆつくりと目じりに触れる指。一度目を閉ざして。開けば。

彼が、かなり近くにいて。どきんと、心臓が高鳴った。いけない。いけない。期待させないで。

「べ、別に。だ、大丈夫だよ。何もないもの」

す、つと、一歩下がる。これが私とお兄ちゃんの距離。近すぎちゃいけない。近づけない年齢の距離。

笑え。笑うんだ。

「ちょっと、喧嘩しただけだよ。付き合ってるんだから、そんなこともあるよね」

——ごめんね、って。謝ったんだ。また。

——もう無理だ、って。ごめんね、って。

——しょうがない、って、笑ってくれたんだ。

——でもあきらめないよって。

「だ、だから、大丈夫よ。もう、お兄ちゃんは心配性だなあ。私ももう高校生だよー」

くすくす、笑って。そう告げたら。

気が付けば、抱きすくめられていた。暖かい腕の中に、包まれていた。

お兄ちゃんのおい。彼の、温もり。ぐらりと揺らぐ心に、一瞬茫然と仕掛けて、あわててそこから抜け出そうとして。

「……背伸びをするのはやめなさい。そんな顔して。ごまかせると思っんじゃないよ」

柔らかな、声が、耳元で聞こえて。

——私は、身動きすら、できなくなった。

5 ・ 今後に期待、しています

ずっと懂れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

ずっと、ずっと。

ただ彼だけを、見つめ続けてきた。

ただ、それだけだった。

心臓が、破裂しそうだ。

回された腕から伝わってくる温もり、とか。
頬に触れる胸元の堅さ、だとか。

ふわりとかおる、彼の香り、だとか。

くらくらとめまいがする。呼吸がおぼつかない。幸せで、嬉しくて
うれしくて――悲しくて。

このままじゃいけない、と、ぐっと体を離そうとした。

けれど。

逆に強く抱きしめられて、私はただ混乱する。どうして？ どうして？
なんで？

ゆらゆら、ぐらぐら、心が期待する。ダメだってわかってても、でも、期待してしまう。

——酷い。ひどいよ、お兄ちゃん。

あまりに苦しくて、ぼろり、と、涙が零れ落ちた。

「……っ、ないて、るんですか」

鼻を小さくすすった音に気付いたのか、戸惑うように声が聞こえて、少し腕が緩む。

その隙に少しだけ離れて、覗き込んで来ようとする彼の顔を避けるように、顔をうつむける。

「なかないで、ください」

再び伸ばされる手。思わず後ずされば、息をのむ音がして。

ひっく、と、一つ、呼吸代わりに泣いてから。

「ひどいよ、おにいちゃん……」

声は、酷くかすれていた。湧き上がる想いと悲しさと、ずきずきする胸が、つらくて哀しくて。我慢できなくて。私は叫んでいた。

「ひどいよ、どうして、どうして、優しくするのよ。恋愛ごっこで、子供って……いったじゃない！ 私なんか、邪魔なんでしょう？！ だったら、優しくしないでよ！ 構わないでよ、お兄ちゃんの、お兄ちゃんの……っ、ばかぁ！ お兄ちゃんなんて、だいき…

…っ」

最後まで言えなかった。再び、私は暖かな腕の中にさらわれていて、強く強く、抱きしめられて、息が詰まる。

どうして、どうして。それしか言葉が浮かばない。ぐるぐるぐるぐる、嬉しい幸せと悲しいと、もう、感情がごちゃまぜで、どうしていいかわからなくて。——ぎゅ、と、お兄ちゃんのシャツの胸元をつかむ。

「……すみません」

抱きしめる手は緩まないまま、耳元で声が聞こえる。吐息。震える声。くすぐったくて身をよじれば、しっかりとホールドしたまま、しかし顔を見られるくらいの余裕が生まれる。深呼吸。苦しかったふわり、とお兄ちゃんの香り。ずきんと胸が痛む。苦しくて、顔があげられない。

「なにを、あやまつてるの。離して、もう、迷惑かけない、から」

震える唇を叱咤して、必死で言葉を紡ぐ。

「違うんです。あんない方して……すみません」

声には、苦渋があふれていて。苦しそうで。はじかれるように顔を上げれば、悲壮な表情をした、彼の顔がそこにあって。

「ちがう、って……」

茫然と見上げれば、深くため息をつく彼。そして、彼はギュッと強

く目を閉ざす。

「……今、何歳ですか」

「え……と、16、だけど」

今更なにを、と、首をかしげる。とたん、瞼を開いた彼は、強く眉を寄せて。

「そう、あなたはまだ16なんですよ。——まだ、いろいろと、大人としては、対応に困る年齢なのです」

ぽかん、と、してしまう。

「え、でも、結婚できる年だよ」

「確かに、法律上はそうですね。しかし、条例上だと……その」

視線がすい、と、そらされる。

青少年保護条例、だったっけ？ うろ覚えのその文字がぼん、と、浮かぶ。

何がいたいんだろう、わからなくて、じっと見つめれば。

うろつろとさまよわせていた視線が、やがて諦めたようにこちらに定められて。

「つまり、あと2年。せめて高校卒業するまで、と、思っていたのですよ」

「……え？」

「小さいころから、まっすぐ自分に向かってきてくれる子がいて、その子が次第に女らしく成長していく。——それに魅了されない男がいると思いますか？　ずっと、まっすぐに向けられる感情がくすぐったくて心地よくて、愛しくて——だけど、だからこそ、いい加減なことをしたくなかった」

なに。何をいつてるの？　彼が言ってる言葉は、わかるのに、理解できない。

頭が真っ白で、茫然と見返してしまふ。

「せめて、高校を卒業してから。それから、一緒に、はぐくんδειければ、と、思っていたんですよ。ゆつくりと、大切に、心と、思いを。——大切だから、愛しいから、ずっと、ずっと、そう、思っていたっていうのに」

「……お、にいちや、ん」

ふう、と、彼はため息をついて。それから、私の大好きな笑顔を浮かべて。

「好きですよ。大好きです。——だから、誰にも触れさせないで。僕のものでいてください」

ゆつくりと、大好きなお兄ちゃんの大きな手が、髪を撫でる。茫然とした私の頭に、言葉がじわ、じわとしみこんでくる。ゆつくりと、顔が熱くなってくる。うそ、うそだ。でも、目の前で彼が優しく微笑んでいて。その目が、とろりと甘い熱をはらんで、いて。

「……すき」

零れ落ちた言葉に、彼の顔がさらに笑顔になって。

嬉しくて、嬉しくて。

——気が付けば、私は、大きな声でなっていた。

小さな小さな子供のよう。彼に遊んでもらっていた、小さなころのよう。

彼は、ただ、静かに、静かに、抱きしめて撫でてくれていた。

「……相変わらずの、泣き虫、ですね」

落ち着いた私に、彼がいう。

「そ、そんなことないもん。泣かせたのお兄ちゃんだし！ それに普段めつたに泣かないし！」

「そうなんですか？ でも、僕はいつも泣いてるところを見てる気がしますよ」

「き、気のせいだし！」

「それから……」

「な、何？」

「お兄ちゃん、は、いい加減なしにしませんか？」

「っ、な、な？」

「名前で呼んでください。ね？」

「あ、う……鋭意努力します！」

くすくすと、笑って。彼は。

「今後に期待、しています」

そっと、耳元に囁いた。

ずっと憧れていた。

それが本当の恋なのか錯覚なのか、なんて、どうでもよかった。

ただ、彼しか見えなかった。

だから――。

恋かどうかなんて、関係ない。

そこにあるのは、きっと、愛なのだから。

F i n

1・誰にでもスキだらけ

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかったわけじゃない。愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。簡単に言葉になんて、できるわけがなかった。

「おにいちゃん、だいすき！」

はじけるような笑顔で、告げられるたび、誇らしくてうれしくて照れくさくて。

ただただ無邪気でいられたのは、幼いころだけ。思春期になれば、感情は複雑に揺らいで。愛しいけれど、大切だけれど——真っ直ぐな感情が、どこか煩わしくて。

どこかつっけんどんな対応になっていたその時代ですら、彼女はまっすぐに、ただひたすらに、こちらを見ていてくれた。

それが恋なのか、ただの家族愛なのか、なんて。きっと答えは、まだわからない。

中学、高校、大学、と。

別に彼女がいなかったわけではなかった。それなりの付き合いもしたし、それなりの相手もいた。

ずっと、彼女を見ていたわけじゃない。ずっと、彼女を思っていたわけじゃない。

けれど。

気がつけば、まっすぐに向けられるその視線を、探していた。

——腹をくくるまでに、時間がかかったのは、自分だけの秘密。

大学時代に、運よく賞を受賞できて、卒業するころにはありがたいことに作家一本で食べていけるようになっていて。実家とは別に部屋を借り、そこで作業することが増えて。

時折帰宅した実家以外で、彼女に会うことが少なくなったとき、ちょうど彼女が受験だと知った。

高校受験。年の差を如実に実感して、苦く笑ったそんな思い出。

——そして。

「おばさんに、許可貰ったんだ！」

幼いころと変わらない、まっすぐな思慕を浮かべ、はじける笑顔の少女が、目の前に、いる。

仕事場のマンション。ある意味一人暮らしの男の部屋へ。

幼いころと変わらぬ笑顔でありながら、その姿はすでに羽化を遂げたかのようで。そう。たとえるならば、花開く寸前のつばみ。みずみずしさと若々しさをたたえながらも、どこかしつとりと艶を帯びる。

——いつのまにか、成長していた彼女の姿に、戸惑う。

仕事に集中しなければ、と、画面には向かうものの、わかっているのか甘えてくる彼女に、心か、体が揺らぐ。

学校帰りなのか、ブレザーの制服姿のまま、短いスカートを揺らして無邪気に構ってくれと甘える彼女。

——それに不埒な思いを抱かない男がいることに、気づかない、なんて。

苛立ちが、起こる。

そんな風に、他の男にも甘えるのだろうか。そんな短いスカートで、学校へ通っているというのか。

その笑顔を、周りの誰にでも見せているのだろうか。——そんなに好きだらけ、なのだろうか。

——このまま、押し倒すことだって、できるというのに。

浮かぶのは不埒な思いばかり。軽く頭を振っていれば、彼女が、その言葉を口にした。

「……好き」

まっすぐに彼女を見つめる。

これ以上は、耐えられない。これ以上は、無理に決まっている。

「恋愛ごっこなら余所でやりなさい」

深いため息と共に、そう告げれば、凍りついたように顔をこわばらせる彼女。

ああ。そんな顔をさせたいわけじゃないのに。

けれど、このままだと、彼女を傷つけてしまいかねない。

「……だって」

「でももだつてもありません。私は、締切前なんです。忙しいんです。遊びに付き合つてゐる暇はありません」

さつさと帰りなさい、と、そう短く告げて。意識を彼女から引きはがす様に画面に向かう。

「あ……の……」

かけられる声にこたえなくなるけれど、答えられない。ぎりぎり引き絞つた理性の糸は、はじけ飛ばんばかりに張りつめているのだから。

しばらく、じつと見つめる視線を感じていたけれど、やがて諦めたように部屋を出ていく彼女。

ぱたん、と、玄関のしまる音が聞こえて、体からやっと力が抜ける。

——あんなこと、言いたくはなかった。

抱きしめて、囁いて、口づけて。とろけるほどに、愛したかった。

——けれど、彼女は、まだ幼いのだ。

15歳。もうすぐ16だろうか。

歳の差はいくつになるだろう。——ロリコン、と、呼ばれないぎりぎりラインだろうか。

花開く寸前の彼女の色香に、惑わされている自分に、呆れてしまう。

もし、その思いのままにぶつかれば、彼女はきっと今以上に傷つく

に違いない。

ならば。

——待つしか、ないのだ。

あと、少し。せめて高校を卒業するまで。

彼女が、本当の意味で花開く日まで。

「これは、かなりきついですね……」

漏れるのは、ただ深いため息ばかりだった。

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかったわけじゃない。
愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。

——身動き取れない、時もあるのだ。

2・眠るきみに秘密の愛を

いつからだろう。

いつから、変わったのだろうか。

ただ愛しい、かわいい、それだけで済まなくなったことに気づいたとき。

静かに、その思いを、胸の奥底に沈めた。

そう古くない、数年前の記憶。

幼いころは、よかった。何も考えずにすんだ。かわいい妹、そう、いふなればそんな存在。

真っ直ぐに向けられる感情もくすぐったくて、どうせ勘違いのいつかは消える思いだろうと思っていながらも、悪い気なんかするわけがなくて。ただ少しばかりうつとおしいな、と、思わなかったわけではないけれど、それでも、かわいい妹分、だった。

それが変わったのは。

いつだったか。

共にお風呂に入ることなくなり、目の前で着替えることがなくなっていた、彼女の小学校高学年時代。

それでもまだまだ、ランドセルを背負った姿は、幼い子供でしかなくて。まっすぐに甘えるのを、いなしながらあやしていた、そんな記憶。

もちろん、そのころから彼女の体は間違いなく女性として成長を始めていて。

……いろいろと変化があったことは、母経由で漏れ聞いては、いた。

けれど。

はつきりとその変化を思い知らされたのは、間違いなく、あの時。

——彼女が中学に入学したとき、ではないだろうか。

はじけるような笑顔で、届いたばかりの制服を試着した彼女が、転がるように跳ねるように隣の我が家まで来て。

とてもうれしそうにその姿を見せた時——たしかに、驚かされた。

間違いなく、彼女は成長していて。

女の子から少しずつ、女性へと変化をしていて。

その事実、ショックを受けたのと同時に、そのショックを受けた自分にすら、衝撃を覚えたのは間違いない。

歳の差や、もろもろ。

もしかして自分にはそういう性癖があったのか、と、それらしき資料を探したり映像をみてみたりもしたが、ほかの少女らの姿を見ても、どうということはない。

なのに、なぜ、彼女の変化に戸惑い、そして心をゆすられたのか。

……少し考えれば、簡単に答えがでるにも関わらず、その答えを出すまでに、そしてその答えを受け入れるまでに、3年ほどかかってしまった。

理由は簡単。

往生際が悪かった、ただそれだけのこと。

理解してしまえば、今度は別の壁が立ちただかる。いくら彼女が成

長したといつても、まだ未成年。否、せめて18歳までは、と、思つてしまうのは、古臭い考えなのだろうか。それでも、愛しいと、大切にしたいと、そう思う相手であればこそ、それまでは我慢の時のだと、強く言い聞かせつつ、今までと変わらず甘える彼女に理性を試されることも多数。——自分の自制心に、これほど感謝した時期は、ないだろう。

無邪気に抱きついたかと思えば、そのまま隣で寝ついてしまう彼女の、その無防備さ。その穏やかで幸せそうな寝顔に、伝えられない想いを、静かに囁いた。——まだ、それで十分だったから。

けれど。

年を取ろうが、年上だろうが、いつも穏やかに心広くいられるわけではない。

無防備な彼女に、まっすぐな彼女に、獣性が目を覚ましかけることも多々あつて。それを抑え込んでいるうちに、少しばかりその無防備さに、隙の多さに、無意味で勝手だとわかつていながらも、妬心を抱いてしまうこともあるわけで。

それでも。

あんな顔をさせたかつたわけでは、ないから。

会つてフォローしなければ、と、ちょうど締切が重なつてはいたけれど合間にこまめに実家に戻つていったのだけれど、なぜか、彼女には会えなかった。

いや、なぜか、なんて、理由なんかわかりきっている。

彼女が会おうと思わないから、これまでのように会うための行動をとっていないから。

会えないのだ、という、事実。

少し時間ができて実家に戻り、リビングでくつろぎながらも、ため息が漏れる。隣家に行くべきか。いや、それで逃げられたらなんて説明をする？　ぐるぐる回る思考の中、ふとみれば、母が電話をしていて。

……帰っていない、と。
連絡もない、と。

すぐに電話を替わり、探しに行くことを伝えて。
家を飛び出したはいいけれど、どこを探せばいいのか、わからなくて。
焦る気持ちに押されるように、あちこちと視線を走らせながら町を走り抜けて。

公園に、たどり着いたとき。

ぼつん、と、ベンチに座る、彼女がいて。

歩み寄れば、寒いのか身震いをする姿。安堵からため息が漏れる。
と、それに気づいた彼女が焦ったように顔をあげて。

……心配しすぎて、つい、憎まれ口がこぼれて。

とにかく、このままでは、風邪をひかせてしまっ、と、手を引いて
家に戻る帰り道。

そう。

時は逢魔が時。などと言いつつもりはないけれど。
魔が差した、と、いうしか、いいようがない。

振り返れば、ほろり、と、涙が彼女のつるりとまろい頬を滑り落ちていつて。

それが、とてもきれいだ、と。どこかぼんやりと、思考の奥で、そう、考えて。

気が付けば、触れていた。

その、すべらかな頬に。濡れた後をなぞるように、ゆっくりと、目をじりをたどる。

濡れたその目が、自分を見つめ返して、ぞくりと背筋が泡立つ。大きく見開かれて、はっ、と我に返る。

いったい、何をしていた！

あわてて手を引いて、握りしめる。

茫然と彼女が見つめるのが、どこか後ろめたくて見透かされているようで。

このまま見つめられていたら、どこかが壊れてしまいそうで。

「っ。子どもはもう寝る時間です。さっさと帰りなさい」

家の前まで来ていたから、背中を押しながら家のほうへと向かわせて。

扉の前まで、どこかふらふらとたどり着くのを確認し終えた瞬間、駆け出していた。

自分の家へ。自分の部屋へ。

どうしたの？ と、のんきに問いかける母に、彼女は帰ったことだけを伝えて、階段を駆け上がり。

部屋について扉を後ろ手に占めた瞬間、そのままずると座り込んだ。

……馬鹿、か、と。

自分の、行動と、言動と。

省みたそれらの、あまりにも馬鹿さ加減と。触れた温もりとその感触の記憶から湧き上がるものの熱に、浮かされるように。

片手で口元を覆うと、座り込んだまま、しばらく動くことができなかった。

3・無意識のゼロセンチ

気が付けば隣にいた。

振り返れば微笑んでいた。

はじけるような笑顔で、駆け寄って、飛びついてくる。

それが、当たり前のことだった。

「……どうしたらいいんでしょうねえ」

つい、弱音を零せば、聞きとがめたのかちらりと母の視線がこちらに向く。

どことなく冷たいその視線の意味は、問うまでもないだろう。

はつきりと聞いてくればいいものを、聞かないところがありがたいのかたちが悪いのか、判断に困るところだ。

なかなか会えない、と、思っていたけれど。

より一層会えなくなるとは、どうということなのだろう。

以前であれば、何かと自分がいなくてきでも、この家に来ていたというのに、その行動がぱたりと途絶えた。

さらに言えば、遠目で見かけることがあったとしても、彼女はこちらなど知らぬ風情で、するりと自宅へ帰ってしまう。

文字通り、避けられている。

頭を抱えて唸りたくなるが、そんな行動をとれば、目の前の母の思っつばである。

まあ、それでも、こうして何気なく実家に帰ってくる回数が増えた息子と、訪ねてくる回数の減った隣家の娘と、考え合わせれば何らかの答えはもっているのかもしれない。

ぼんやりとリビングに居座る自分を、多少うつとおいしいような視線を向けつつも、放置していてくれるのだから。

「まったく。少しは手伝いなさいな、でかい図体していい年して」

そうでもなかった。キッチンに立って料理をしながら、ぼそりとつぶやかれた言葉は、とりあえず聞かなかったことにして、立ち上がると冷蔵庫へ向かう。

飲んでないとやってられないよな、と、冷蔵庫を開けると、ビールと発泡酒が並んでいた。迷わずビールを取ろうとしたところで、さえばしで手をたたかれる。

「っ、なにを」

「誰がビールとっていいといった。それは父さんの。あんたは発泡酒で十分」

ほれほれと発泡酒を押し付けられ、どこか理不尽な気分で眉をしかめれば、ふんと、母に鼻で笑われる。

「もっと売れっ子になったらビールでもいいウイスキーでも飲ませてやるわよ。ああ、それ以前にもっと甲斐性がついてからかしら」

おほほほ、と、軽やかにわざとらしい笑い声をあげる母に、ため息が漏れる。

かなり、いろいろとご機嫌がよろしくないようだ。母は彼女が気に

入っていた。訪ねてくる彼女が、ほとんど最近顔をみせないとなると、不満もあるのだろう。ここは甘んじて受けるべきか、と、缶を片手にテーブルへ戻る。

と。

チャイムが鳴る。

客か？　もしかして？　とそちらを見れば、手が離せないらしい母がさえばしでそちらを指し示す。

「あー、あんた、出て」

しょうがない、というそぶりを見せつつも、心臓になる。もしかして。もしかしたら、彼女が来たのではないだろうか。

年甲斐もなく煽る心臓をなだめつつ、少し小走りになりながら向かった玄関で、扉を勢いよく開けば、驚いたように目を見開く彼女がそこにいた。

「あ……」

茫然と、しかしどこか今にも逃げ出しそうな彼女に、焦る。

「……久しぶりですね」

もったこう、ほかにないのか、と、自分に情けなくなりながらも言葉を継げれば、彼女が焦ったように手に持っていた荷物を渡してくる。

「あ、あの、これ。かーさんから。おすそ分けとあと、回覧板！」

ぐい、と押し付けるように渡されたそれを、思わず受け取れば、彼女はそのまま、頭を下げた。

「じ、じゃあ。おじゃましました！」

「あ、待ってください」

逃げるように去ろうとする彼女を、引き止める。謝罪したい気持ちや、伝えたいけれど伝えられない思い。

思わずつめた距離は、かなり近くて、そう、あと少し手を伸ばせば、抱きしめることができるほどの距離で。誘惑に、心が揺らぐ。

けれど。

そんな自分の気持ちなど、彼女は知る由も、なく。

はじかれるように、彼女が視線を合わせぬまま、言葉を紡ぐ。

「あ、あの、その。うん、今まで迷惑かけてごめんなさい。お兄ちゃん忙しいのに、なんか邪魔ばっかで。うん、だいじょうぶ、私は平気だし、うん。あ、友達にいわれたんだ、新しい恋でもしたらって。がんばってみようかなーっておもうんだ！ だから、うん。いままでありがとうね、お兄ちゃん！」

何も、いえなかった。やめろ、と、言う資格が、自分にあるのか、とか、邪魔じゃない、とか、言いたいことはいっぱいあるはずなのに、言葉にならなくて。きりきりと、胸の奥に、差し込むような痛

みを覚えた。

そうじゃない、好きなんだ。誰よりも大事なんだ。抱きしめて、そう伝えたい。——けれど。見守るんじゃないのか、とか、彼女も変わるうとしてるんじゃないのか、とか、彼女の行動を止める権利が自分にあるのか、とか、次々と言葉が浮かんで消えていく。

ゆっくりと、距離を取る。

さっきまでは、0に近い距離。今は、少し遠い。

深く深く、深呼吸をして、動揺を鎮める。せめて、愚かな思いを隠しきれるように、と、それを願いながら、言葉を紡ぐ。

「あなたの気持ちは、よくわかりました。——引き止めて済みません。おばさんにお礼いっておいてくださいね」

彼女の顔を、みることができなくて。

そのまま、静かに扉を閉じる。

手の中のお裾分けは、ほんのりと暖かくて、それが最後のつながりのようで、思わず強く、握りしめた。

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかったわけじゃない。

愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。

簡単に言葉になんて、できるわけがなかった。

だけど——自分は、どこで間違ってしまったんだろう。

答えは、まだ、見つかриそうになかった。

4・きみの心に触れさせて

どうすればいいのか、なんて、答えがわかっていれば間違ふことはなかった。

わからないからこそ、間違つてしまふ。それが、人間というもののだろう。

物語の中で、自分が綴ってきた人物たちのことを思う。

何もかもをわかって綴っていた、自分は、もしかしたらいつのまにか、現実ですら心の中を見透かせるような気がしていたのだろうか。そんな愚かな自分を笑ったところで、何が変わるわけでもないのだ。

会いたい。会いたい。けれど、会って何を言えいいのだろうか。どういえばいい。どう説明すればいい。そもそも、何を伝えるというのだ。

好きだと。好きなのだと、今の自分に伝えられるだろうか。それが許されるだろうか。

——ぐるぐると堂々巡りの中、仕事は容赦なく襲ってくる。

締切がこんな時に重なるなんて、と、多少の苛立ちに紛れて、ひたすらに文章を書くことに没頭した。

不意に襲ってくる、切なさとの笑顔の面影を、振り払うように。

会わなければ薄れる思いなら、それだけのことなのだと、痛感させ

られる。

集中が途切れた瞬間、彼女の泣き顔と言葉が、浮かんでは消えていく。

少し前ならば、会いたいと思う間もなく、彼女はそばにいた。

少し放っておいてくれないか、と、言ってしまいそうなくらいに、傍にいた。

今は、いない。

会うことも、ない。

——恋愛ごっこならよそでやりなさい。

自分の言った言葉が、自分に跳ね返ってくる。

決めつけてそう告げた言葉は、確かに苦肉の策から出たものであったけれど、それは言っではならない言葉だった。彼女の想いを、気持ち、勝手に決めつけてはねのけてしまった、言葉だった。

ふいに、不安がよぎる。

——新しい恋でもしたらって。がんばってみようかなーっておもってるんだ！

もう、遅いのか。今頃、こうして必死で仕事をしている間にも、彼女はすでに新しい恋を見つけてしまっているのかもしれない。もう、自分のことなど、忘れてしまっているのかもしれない。

それでいい、と、思っていたはずだった。

自分に一直線に向かい続ける思いだけではなく、いろんな感情を知り、いろんな出会いをしていてほしい、と、そう願っていたはず

だった。つい先日までは、それでいいと、耐えられる、と、思っていた。

しかし、今のこのざまは何だろう。

想像するだけで、身を焼かれるようで、自分の中にこれほどの激情が眠っていたのか、と、不思議にすら思える。

独占欲。嫉妬。どろどろと醜くも人らしい感情に、苦く笑いが漏れた。

どんなにあせろうが気になろうが、仕事は待つてはくれない。

締切が片付くまでのひと月。丸々とひと月とちよつと。仕事場から外に出ることもかなわず、ほぼ缶詰状態となってしまった。よほど切羽詰まっていたのか、鬼気迫る形相と、その思いの丈を昇華しづつけられて生まれた作品が、予想外に編集に好評価だったのは、思いがけない幸運だった。

やつと解放された、日曜の昼間。

一度、隣家に訪ねていったものの、彼女は出かけていた。ニヤニヤと隣のおばさんが告げた言葉に、嫌な予感がするものの、そのまま実家に帰る気にもならず、ふらりと、街へと足を向けた。

だからといって、何か用事があるわけでもない。ふらりふらりと人間を眺めながら、本屋でも向かうか、と、思っていた時だった。

「……おや」

叫びださなかったのは、年のたまものだと思いたい。

視線の先、同年代の少年と二人、並んで歩く彼女がいた。どこか初々しい雰囲気二人は、そう、はたから見ればどこまでもお似合い

で——じりり、と胸の奥が焼け付く。

こちらに気づいて、驚いたように目を見張る彼女に、ゆっくりと歩み寄る。わざと不思議そうな表情をして、自然になるようにと心がけながら近づいて、やっと隣にいる少年に気づいたそぶりを見せる。どこかと惑うように頭を下げる少年に、こちらも礼を返ししながらこつそりと観察をする。若い。当たり前だけれど、若く、そして、頭も悪くない。こちらをどこか訝しく見つめる視線は、すでにこちらをライバルだと見極めているようだった。

「……デート、ですか」

しばし落ちた沈黙を破るように口を開けば、はじかれるように彼女が顔をあげる。見つめる先で、視線が不安そうに揺らぎ、困惑したように視線を話迷わせはじめ。

いじめるつもりではないのだから、と、さらに口を開こうとすれば、ぐい、と、彼女の体がひっぱられた。

見れば、少年がこちらを強く強く睨み付けながら、彼女を引き寄せていた。——瞬間的に引きはがしそうになるのを、必死にこらえる。

「デートです。失礼します」

ぺこり、と、再び少年は頭を下げると彼女を引っ張るようにしながら、その場を離れていく。

「あ、え、ちょ。う、おにいちゃ、またね」

振り返りながら告げる彼女の言葉を聞きながら、引き止めることもできたけれど、素直に見送る。

焼け付くような思いが、胸を焦がすけれど、それでも、もし、彼女

があの少年を選ぶというのならば——幸せになれるのであれば、祝福しかないじゃないか。

引き寄せたくて伸ばしかけた掌を、強く、強く握りしめた。

——それでも、未練がましいのは、情けないが性分だろう。

ゆっくりと時間をつぶす様なペースで実家へと帰り、玄関前で立ち止まり、隣家を眺める。

あのままデートを続けたならば、まだ当分帰ってこないだろう。初々しい雰囲気から、どうこうという関係にまではなっていないかもしれないが——と、想像しかけてあまりの胸糞悪さに強く頭を振ってそれを追い払う。

口の中だけで、らしくなく低く悪態を漏らして、ため息をつく。

あきらめが肝心じゃないか、と、自分に言い聞かせるように呟いて、門扉に手をかける。

と。

気になって、振り返れば、遠くに人影がみえる。どこか消沈した風情で、とぼとぼと見るからにおぼつかない足取りで、ゆっくりとこちらへ向かってきている。

見間違えるはずなんか、なかった。

あわてて傍に駆け寄る。うつむいて歩いている彼女は、こちらに気づかず、目の前まできてやっと、顔をあげた。

その表情が、まるで今にも泣きだしそうで、まさかという思いから怒りがわき起こる。

「おにい、ちゃ」

「何をされたんですか？」

「え……？」

「何かされたんじゃないんですか？——そんな、今にも泣きそうな顔して」

自然と手が伸びる。ほほをたどり、涙が零れ落ちそうな目じりをぬぐう。その指の動きにのまめに閉ざされる瞳に、誘われるような気がして、そのまま唇を奪いたい衝動を、必死でこらえる。

やがて、我に返ったように、彼女が身を離す。

「べ、別に。だ、大丈夫だよ。何もないもの」

一歩。彼女の離れた距離、これが、今の彼女が感じている距離なのか。

「ちょっと、喧嘩しただけだよ。付き合ってるんだから、そんなこともあるよね」

歪んだ笑顔を浮かべ、必死で言い募る彼女は、気づいているのだろうか。

「だ、だから、大丈夫よ。もう、お兄ちゃんは心配性だなあ。私ももう高校生だよー」

彼女の、癖。嘘をつくときは、少しだけ、瞬きが増えることを。

必死に虚勢を張りながら、どこか歪んだ笑顔を浮かべ、小さく笑いを漏らす彼女をみていると――耐えられなかった。

抱きしめていた。小さな彼女を、泣き出しそうになりながらも微笑む彼女を、そのままにしておけなかった。

彼女の香りが、伝わる。温もりが伝わる。小さな体、しかし、すでに成長した、女性であるその体を、労わるように抱きしめる。硬直していた彼女は、やがてあわてたようにそこからぬけだそうと、するから。

より一層、強く抱きしめた。

無理しなくていいから、そんな風に頑張らなくていいんだ。謝つてすむならば、いくらでもあやまるから、どうかごまかさないでくれ。どうか、隠さないでくれ。

――ありのままの、君の心を、見せてほしい。

「……背伸びをするのはやめなさい。そんな顔して。ごまかせると思っんじゃないよ」

ただ、それだけを願いながら、抱きしめたまま、彼女の耳にそつと囁いた。

5・狼まであと何秒？

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかったわけじゃない。

愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。

簡単に言葉になんて、できるわけがなかった。

だけど、みすみすほかの男にかっさらわれるなんて、指をくわえて見ていられるわけがない。

一度は、彼女が幸せになるなら、などと、物わかりのいい大人ぶって諦めようとしたことなど、記憶の奥底へ沈めこんで、今はただ、抱きしめた。やっと、この腕の中に囲うことのできた温もりを、確かめるように抱きしめ続けた。

幸せになるならいい。

けれど、こんな顔をさせる相手になど、誰がくれてやるものか。

伝わる温もりが、ジワリと体の熱を煽る。普段はあまり強く脈打つことのない心臓が、拍動しているようで、その余裕のなさが彼女に伝わりはしないかと、不安がよぎる。けれど、それでも、彼女を抱きしめる手を緩める気はなかった。離すことなど、できなかった。

そうだ。

彼女が欲しい。

どれだけ言い訳しようと、大人ぶろうと、言葉を重ねようと、結局はそういうことなのだ。

今、腕の中にある彼女の温もりが、愛しくて、身じろぐ彼女を閉じ込めるように、強く、抱きしめた。

触れる腕から伝わる柔らかさと、その香りに、改めて彼女がもう少女から脱皮しようとしている年頃なのだと痛感する。特に香水などをつけているわけじゃないだろうに、なぜこんなに甘く香るのか。人は、お互いに求め合う相手の香りを心地よく感じるという。ならば、彼女は、自分にとって最良の相手なのだろうか。

油断すると、手が彷徨いそうになるのを、思考を巡らせることでとどめる。不埒な思いは、今はまだ封じておかなければならない。けれど――ああ、男は才オカミなのだ、などと、使い古されたフレーズを使うまでもなく、間違いなく今、無意識の誘惑に振り回されているのだ。

けれど。

「……っ、ないで、るんですか」

すすり泣くような声が聞こえて、焦りながら少し力を緩めれば、涙が目元から零れ落ちるところだった。成長したとはいえいまだまるさを残す少女めいた頬を、静かに涙が伝う。綺麗だ、と、目が離せない。泣いている、泣かせた、という意識よりも、その、涙の流れる様に、目を奪われた。

見つめる先、彼女はその視線を避けるように目を伏せる。ああ、隠れてしまった。そっと覗き込むようにすればむずがるように無意識にか首を振る。鼻をすするような音に、胸が軋む。

「なかないで、ください」

途切れ途切れに告げた言葉は、どこか掠れてしまっていた。そつと、その涙をぬぐおうと手を伸ばせば、びくりと彼女は、それを避けた。思わず、息をのむ。拒否されたことで、胸が痛みを増した。

「ひどいよ、おにいちちゃん……」

うつむいたままの彼女がつぶやく。ひどく掠れたその声は、苦しうに吐き出された。そして、勢いよく顔をあげた彼女は、涙にぬれる顔をそのままに、こちらを睨み付けながら叫んだ。

「ひどいよ、どうして、どうして、優しくするのよ。恋愛ごっこで、子供って……いったじゃない！ 私なんか、邪魔なんでしょう？！ だったら、優しくしないでよ！ 構わないでよ、お兄ちゃんの、お兄ちゃんの……っ、ばかあ！ お兄ちゃんなんて、だいき……っ」

最後まで聞かず、再び強く抱きしめる。強く強く、彼女を支えるように、そして——まるで自分がすりつくかのように。

胸が痛む。心臓が、激しく脈打つ。頭が真っ白で、血が上っているのか引いているのかわからない。わかるのは、自分が愚かだということ、そして、彼女を傷つけていたという事実だった。

腕の中で震える彼女を、ただ抱きしめる。体をこわばらせていた彼女が、やがて少しだけ力を抜いて、ぎゅ、とこちらのシャツをつかんできて、再び心臓が激しく脈打つ。

「……すみません」

声が震える。まるで吐息のような言葉を、抱きしめた彼女の耳元で

ささやくように告げる。ひとつ息をついて、少しだけ腕の力を緩めるけれど、彼女は胸に顔を隠す様に埋めたままだった。

「なにを、あやまつてるの。離して、もう、迷惑かけない、から」

震える声が告げる言葉に、苦しくなる。

違うんだ。そうじゃないんだ。本当は――。

湧き上がる想いのまま、素直に言葉を紡ぐ。

16歳。結婚はできるけれど、まだ法令に保護される年齢であること、そして、あと3年、待つつもりだったこと。

ぽかん、と見返す彼女の顔をまっすぐ見られなくて、視線をそらす。

「小さいころから、まっすぐ自分に向かってきてくれる子がいて、その子が次第に女らしく成長していく。――それに魅了されない男がいると思いますか？　ずっと、まっすぐに向けられる感情がくすぐたくて心地よくて、愛しくて――だけど、だからこそ、いい加減なことをしたくなかった」

せめて高校を卒業してから、それからゆっくりと、時間をかけられれば、と思っていた。本当にお互いを思いあうのなら、それでもいいだろうなどと、思われる余裕からか、勝手に判断していたのは愚かな自分だった。

「……お、にいちゃ、ん」

どこかまだ、茫然とした様子で見返す彼女に、一つ深呼吸して微笑む。

そつ、愚かだった自分は、もしかすると年齢差を言い訳に、逃げて

ただけかもしれない。そう、彼女に間違いなく感じる愚かな劣情を、相手が幼いのだからと言い訳することでごまかして、逃げていたのかもしれない。

——もう、間違わない。

「好きですよ。大好きです。——だから、誰にも触れさせないで。僕のものでいてください」

ゆっくりと柔らかな彼女の髪を撫でる。茫然としていた彼女の顔が、じわりじわりと驚きへと変わり、次第に朱に染まっていく。そのさまが、愛らしくて愛しくて——口づけたい、と、思う気持ちを、ねじり伏せる。

「……すき」

返された言葉は、ずっと何度も聞いていたにもかかわらず、今までに聞いたどの言葉よりも、心を満たしてくれた。

緊張の糸が切れたように泣き出した彼女を抱きしめて宥めながら、静かに、手の中にある幸運をかみしめたのだった。

「……相変わらずの、泣き虫、ですね」

「そ、そんなことないもん。泣かせたのお兄ちゃんだし！ それに普段めつたに泣かないし！」

「そうなんですか？ でも、僕はいつも泣いてるところを見てる気がしますよ」

「き、気のせいだし！」

「それから……」

「な、何？」

「お兄ちゃん、は、いい加減なしにしませんか？」

「っ、な、な？」

「名前で呼んでください。ね？」

「あ、う……鋭意努力します！」

そう、早く、名前で呼んで。

待ってられるのは、あと少し。理性はもう、ぎりぎりの綱渡りなのだから。

今まで待った時間が長いから、これからもまだ大丈夫。

けれど。

「……期待、してますよ」

眠れる狼が目覚めないように、どうか、気を付けて。

真っ直ぐに向けられる感情が、嬉しくなかったわけじゃない。
愛しくて、恋しくて。誰よりも大切だからこそ。
簡単に言葉になんて、できるわけがなかった。

けれど、大切だからこそ、失えるわけがなかった。

愛も恋も、関係ない。

君が唯一の、大切な人。

f i n

1. そんなに見つめられたら、貴女を好きになってしまいます。

いい人生だった、などと言うつもりは毛頭ない。

気が付けば80年、独り身で生きてきた。

さみしくないのなどと、親切ごかして言ってくる輩も、最後の方は何もいわなんだ。

いや、言ってくる連中ににじむのは、優越感と、そして自らもすでに忘れ去られた老人であるというさみしさだろうか。

まあ、人のことなんぞ、知ったことじゃない。

末は独居老人の孤独死か、見つけてくれる人間に当てがない以上腐敗がひどくならねばいいが、などと思っていたのだが、ありがたいことにどうやら病院で死ねるらしい。

大丈夫ですよ、頑張ってくださいなどと言ってくる看護師に、死ぬ人間に何を言うか、誰が今更頑張らねばならんと返せば、どうやら扱いにくい患者と認識されたく、必要最低限になったのはある意味幸いだった。

次第に意識が遠くなる。すでに痛み止めの薬をぎりぎりまで使っている現状、もともと朦朧とした意識であつたが、最後に多少思考できたのはありがたい。

いい人生だった、などと言うつもりはない。

女一人、生きてきた人生の終わりなど、こんなものであろう。

そう。

終わりのはずで、あったのだが。

気が付けば、白い空間に存在していた。

死んだはずだ、と、しばし思考にとらわれるが、やがて呼ぶ声が聞こえた。

生前の名前、そう、それに間違いない呼び声に、顔を上げる。

白い空間に白い幽霊がいた。怪しすぎる。何かの呪いか、マジックか。大がかりな設定で騙す気だろうと、訝しく睨んでいれば、目の前の幽霊がもじもじと揺らいた。妙に気持ち悪い動きだったために、思わず後ずさる。いかん、たいていのことには動揺せぬようになったとおもっていたが、悶える幽霊はさすがに気持ち悪い。

ぐらりと、体が揺らげば、幽霊がよろりとのびてきて、抱き留めてくれた。抱き留めてくれたのはいいのだが、その動きが何やら怪しい。気持ち悪くなって、強く振り払えば、すすすと再び元の位置に戻っていく。

なんだ、この幽霊は変態か、思わず思考すれば、ふるふると幽霊が揺れる。

「違いますよ、転んだら危ないと思って支えていたんです」

支えるのにうごめく必要があるのか、と、その言い分を無視していたならば、ごまかす様にふるんふるんと二度震えた。

「お願いがあるのです」

幽霊が告げる。

「断る」

「そこを何とか」

「断……る」

くらり、と思考がぶれる。なんだこれは。意識の中に何かが存在しているような、かき回されているような——酔わされているような、そんな感覚が襲ってくる。ぐるぐると回る脳内を喝をいれて落ち着かせる。なんだこれは、まるで洗脳のようなだ、と、そこまで考えた時だった。

「洗脳なんてとんでもない……ただの催眠です。」

よし、どうやら目の前にいる幽霊は、果てしない変態らしい。思考を読むなどと、変態の所業に違いない。激しく蔑んだ視線を向けていれば、それすらも無視して、とうとうと幽霊は語り始めた。

「あなたには、ある世界へと転生していただきます。なにせ、80年間清らかな乙女であった魂など、いまどきなかなありません。さいきんの若い娘たちはどうにも、そのあたりが緩やかでして。いえ、愛の形はどうであろうとかまわないのですけれどね、聖女や巫女として召喚するのに、なかなかそのあたりが難しくて。だから、どうしても若い娘さんを召喚することになるんですが、そうになると今度は転生や召喚された後に、周囲のだれかとくっついてしまうんですよねえ。それじゃ聖女や巫女として送り出す意味がない。ゆえに！ このたび、あなたのような清らかな女性の魂を選び出し、厳

選して転生させることに決まったのです。というわけで、向こうの世界をどうかよろしく願いますね。とりあえず、そこその年齢の成長した体に転生していただきますのでー。あ、そうですね、16くらいでいかがでしょう。では、どうぞ、いい異世界ライフ並びに、いいお仕事をお願いいたしますー」

こちらの視線をもろともせず、一息だった。ひとの拒否すらも聞かず押し付ける変態か。死ねばいいのに、と、蔑みを一層強くすれば、再びもじもじと幽霊が悶え始める。

「そんなに見つめられたら、貴女を好きになってしまいます。」

あほらしい。

半眼になってしまったのに気づいたか、幽霊は気を取り直したように？ まっすぐになると、次第に光り始めた。

「それでは、異世界にいつてらっしゃいませー。あとはよろしくお願いますねー」

次第に強くなる光に視界を奪われながら、思わず目を閉じるとふわりと体の浮く感覚がし始める。

だんだんとそれに伴い、薄れていく意識の端で、幽霊が挨拶するように揺れるのが見えた。

「あ、そうそう、多少人より好かれやすい体質になりますのでお気をつけてー」

いらんがな。

というか、いつの間に行くことになった。とるんだ。

そんな思いなど、どこ吹く風。

こうして、私は、死と共に今まで生きた世界へ別れを告げ、わけのわからぬ幽霊のいうがままに、知らぬ世界へと旅立つのだった。

「……いやあ、男性の30代超えて魔法使いとかその上の大賢者っていうのは割といるんですけどねえ。この場合、なんと呼べばいいのやら」

白い空間にぽつんと残された幽霊の、つぶやくような声だけがあたりに響いていた。

2・僕に会いたかったって、正直に言ってしまったていいんですよ。

「×××××！ ××××××××××××××！」

光が薄れれば、そこは見知らぬ場所だった。石造りのどこか冷たい印象を与える部屋の中央、自分の足元には、いかにも怪しげな文様が光り、その周囲には大仰な服装をした、どこぞの仮装集団のような男どもが、その文様を囲むかのように立っている。

はて、と、とりあえずは周囲を睥睨する。眉間にしわが寄るのは仕様である。長年しかめ面をしてたら、そうなるのが普通だと思うのだがいかがだろうか。疑問はいくつもあるが、まず一番問題なのはアレであろう。

「言葉がわからん、とな」

「×××××……？！ ×××××××！」

何かをいつているらしい、とはわかるのだが、一切こちらには伝わらない。むしろわからない言葉なぞ、神経に触るだけだ。眉間の皺が深くなる。

「ええい、煩い。少しは黙らんか。男がぺらぺらぺらと、軟弱な」

言葉に含まれた苛立ちが伝わったのか、沈黙が落ちる。しかし、これからどうすればいいのやら、とんとわからぬ。異世界とやらに飛ばされたこと、生まれ変わったこと、年齢は15・6であること、それ以外には何もわからぬ。そういえば、何をしろとも言われてな

かったことを思い出し、余計しかめ面になる。この癖のおかげで晩年、顔が皺だらけだったのだが、まあ、今は若いらしいのでよいことにしておこう。

さて、どうしたものか。

このままここにいても仕方がないのだが、と、睥睨しながら思索した。

こちらが思索している間に、どうやらあちらも思索しひそひそと相談をしていたようだった。ひそひそと隠れるように言葉を交わすのは、一番偉そうな男とそこそこえらそうなまるで神職のような格好の男だ。神職といっても日本のそれではなく、なんとなく神職のようだ、という区別なのだが。

やがて話がまとまったのか、えらそうな男が一步前に出てくる。身長が高い。2 m近いのではあるまいか。生前の身長は当時にしては高めの160近かったのだが、不思議なもので年を取るにしたがつて縮んでいったから、150 cm半ばだろうか。今の身長は、ざつと逆算するに生前、若いころに近いようだ。それでも、見上げる位置にあるそのえらそうな男の顔を、睨むように見上げれば、男はたじろいだ様に目を見開く。なんぞ、この顔が醜いのだろうかと、思わず顔に手を当てれば、男の表情がとろりと溶けた。……あまりその変化の様子に、背筋に毛虫がはったような感覚を覚えて後ずさる。あの例の幽霊よりも気持ち悪い。あの幽霊もたいがい気持ち悪かったが、それ以上だ。

男はそんな様子も気にならぬように、とろけた顔のまま、じわりじわりとこちらに近づいてくる。それにつられるように睨み付けるま、じわりじわりと後ずされば、次第に人垣が割れ、壁際まで追いやられていた。おお、なんということだ、大の男が（おそらく）小

娘に向かってそのような所業をするなど。

「いい加減にしとくれ！　いったいなんだっていうんだい」

叫ぶように告げれば、男は宥めるかのように頷いて、ゆっくりと手を伸ばしてきた。どこかうつとりとした表情のまま男が伸ばす手を眺めていると、そのまま頬に触れようとしていて、思わず叩き落とす。

「××……！？」

「簡単に触るんじゃないよ！　気持ち悪いったらありやしない、なんだいここは、礼儀もへつたくれもあつたもんじゃないね」

腕を組んでふん、と、鼻をならせば、後ろから例の神職のような人が現れ、えらそうな男に何か言ったかと思うと、一歩前に進み出てこちらに向かって身振り手振りで何かを伝えている。

「××、×××××××！　××××……××！」

しらんがな。

わからん言葉で言われたところでわかるわけがない。眉間にしわを寄せただ首を振ってやる。茫然とする神職らしき男に、えらそうな男が一言告げる。驚いたように神職が振り返り、一瞬否定らしき声をあげたが、やがて声が小さくなり、諦めたように頷いた。そして

えらそうな男は、えらく威張ったような得意げな顔、ああ、生前に聞いたどや顔というのはこういうものだろうか、をこちらに向けて一言何かを告げた。だからわからんというに。そして、そのままぐ

つと身を寄せて、顔を近づけたと思ったら、顔を寄せてきた。……
なにをするか、この変態が！

力一杯、男を張り飛ばす。本来ならば少し揺らぐかどうかであつた
だろうが、なぜかその威力は、絶大だった。男はすつとんだ。なん
ぞ?! と、やった自分も驚いた。周囲は茫然、飛ばされた男も茫
然とこちらをみている。うむ、やりすぎたか。えらそうな男である
以上、えらいのである。う。えらい男を張り飛ばすとは、いろいろま
ずいかもしれぬ。だが、そうたやすく唇を許すほど、落ちぶれては
おらぬ。あれは初恋の遠き淡い思い出の太郎さんにささげた大切な
もの、そのあと一切縁がなかったとはいえ、それ以外にささげる気
は微塵もない。

一瞬の躊躇ののち、しかし再び睨み付いていると、えらそうな男に
騎士が駆け寄り、周囲を囲む。そしてそいつらが、手に持った剣や
槍をこちらに向けてきた。まあ、こうなるわな。こりやどうするか
と、思案する。しかし、あの幽霊め、とんでもないところに飛ばし
やがって。今度あつたら張り倒してやらねばならん、と、思ってい
たところに、である。

「呼びました？」

ひよこ、と、白い幽霊。否、白い幽霊と同じ声の、光る人間が現れ
た。なんだこれは、と、見れば、周囲のえらそうな男ども一派が、
どよどよとどよめいて額づいて礼をはじめ。おやどうということだ
と、幽霊に視線をむければ、輝くような笑顔を返された。

「僕に会いたかったって、正直に言ってしまったていいんですよ。」

ふ、と笑いが漏れる。そうだ、笑顔だ、久々に笑顔が浮かんだな、

と、我ながらどうなのかと思うようなことを考えながら、元幽霊をみやる。

「会いたかった。――殴り倒すために、な」

そのままの勢いで平手を大きく振りかぶるが、するりとよけられて、そのまま嬉しそうに抱き留められる。

「ああ、あなたから飛び込んでくれるなんて。危機的状況まで待ったかいがありました」

なんだそれは。ふざけるでない、と、内心舌打ちしながら睨みあげれば、嬉しそうにどこかしこと撫でさすりながら微笑む元幽霊の姿。

「どういう意味だ、なんだ、今まで様子をみていたとでもいうのか」

振り払いながら言えば、元幽霊は、照れたように視線をそらす。

「男のロマンについて研究しているだけです。危機的状況に落ちいった情勢を助ける、ありがとうございます！ あなたにずっとついていくわ！ という展開、ロマンじゃないですか」

ありえん。

毛虫を見るような目で見つめれば、もじもじと身じろぐ元幽霊。気持ち悪い。幽霊の時でさえ気持ち悪かったのが、より一層気持ち悪くなっている。これどうしてくれよう、と、思っていると、やっと気を取り直したのか、元幽霊が説明を始めた。

「実は、ぼくは神様なんです」

どうやら、元幽霊は頭がおかしかったらしい。

気の毒そうな目で見つめれば、ぽっと頬を染めて身悶える、自称神様。いや、気持ち悪い以外ないから、話を勧めてくれ。

「で、この世界が僕が作った世界ですね。で、あなたは聖女。本来、この世界の人間と何らかの形で交わることで言葉がわかるようになるのですが……あなたにはそれをやってもらうと困ります。ので、言葉わからないままでがんばってください。あと、すべきことです。が、またそれは後日お知らせしますね。なにはともあれ、この世界で、のんびり清らかに生活してください。頑張ってくださいね」

「……帰りたいのだが」

「無理です、諦めてください」

深くため息をつく。はてさて、どうしたものか。どうしようもないのだが。

ちらり、と、床に伏せている男どもを見やれば、ちらりちらりと気になるのかこちらをみている。視線がぱちり、とえらそうな男に合えば、ぽっと頬を染めた。きもち悪い。大の男の所業ではない。

「……いろいろとこの世界、間違ってないか？」

「諦めてください」

にこやかなままの自称神の答えに、脱力感が襲う。何はともあれ、このままこの世界で頑張るしかないらしい。

やがて、自称神は振り返ると、床に伏せた男たちにごによごによも

じよもじよと何事かを告げた。ははーと、ありがたそうにそれを聞く男どもだが、言葉がわからないこちらにはなんのことやらわからない。まあよかろう、と、待っていれば、振り返って自称神が言う。「それでは、彼らがこれからの生活の世話をしてくれますので。頑張ってくださいね。それに、そろそろアレが効いて来る頃ですね。ええ、きつとあなたなら大丈夫。検討を期待してます。それではまた！」

にこやかに手を振れば、自称神は光に包まれて消えていった。

……いろいろと、だな。頑張ってたなにをだ、とか、アレってたんだ、とか。わからないことがあるのだけれども、恐る恐るとこちらに近づいてきて礼を取る男どもが、身振り手振りでどこその部屋に案内しようとしているようなので、とりあえずついて行ってみることにする。

なにやら、その男どもの眼が、どうにも気持ち悪い気がするのだが、とりあえずは気にしないことにしておく。気にしたらいろいろ終わりが気がするの、気のせいだろうか。

次、あの自称神にあつたら、必ず殴る、と、心に決めて、どこか気持ち悪い桃色な空気を醸し出す男どもに連れられて、その怪しげな部屋を後にしたのだった。

3・僕のために恥ずかしがる貴女が、とても愛しく思えるんです。

丁寧に案内された部屋は、思わずたじろいでしまいかねないほどの豪華さで、今まで六畳2間のアパートにおいて人生の大半を過ごしてきた身としては一瞬足が止まった。いやいや、貧乏性というなかれ、女一人、一生働いたところで老後もらえる年金なんぞすずめの涙。貯金は当然しつかりしてはいたが、それでも無駄遣いなどできるものではなかった。老後に豪遊生活何ぞ夢また夢、悠々自適ではあったが質素な生活を送っていたのだ。

しかしながら、こちらが躊躇する様を見せたところで何が変わるでもない。言葉が通じない故に、不思議そうにこちらを伺うばかりで事態が何か進むでもない。それならば時間を無駄にするよりもさっさと行動するに限ると部屋に足を踏み入れた。

促されるままにソファへ腰を下ろし、紹介するかのように綺麗な揃いの身なりの娘たちを紹介される。促されるままにこちらに向かいもごもごと何事かを言っでは頭を下げ、を交互に繰り返していくのが3人、どうやらこの者たちが世話係らしい。世話係など、多少体の自由が利かなくなつた人生の最後の頃に世話になつたヘルパーさんたちしか記憶にない。一生を通して大病することなくほどほどで生きてこられたが故の僥倖ともいえるであろうが、そのヘルパーさんらが入るまでもに苦勞をした。まず、最初に来たケアマネージャーなるものがえらく若く、若いだけならばよいのだが人をばけ老人扱いしおる。最初からその対応だつたが故に、きつちりとその総括のところ連絡を入れれば変えてもらえたが、その後のヘルパーも数名、こちらの性格がねじ曲がつてるからか、勤められないと変わっていった。はてさてこの娘たちはどれほどの根性があるものか、と、目を向ければ、ぽつと恥じらうように頬を染める娘たち。

……なにごとぞ。

もしや、男だけではないのか、と、すでに諦念を含んだ思いでため息を漏らせば、ここまで案内してきた男がどこか名残惜しそうに退室し、娘たちが動き始めた。一人はお茶の用意をはじめ、一人は隣の部屋へと向かう。残りの一人が隣に控えていれば、やがて何ともよい香りが漂い始めた。お茶はどうやら紅茶の類らしい。嫌いではないが、贅沢をいうならば緑茶が欲しかった。さすがにこの世界にあるのかどうかは知らんが、そのうちあの幽霊、ではなかった、自称神とかいう存在が本当に神ならば、用意させるのもやぶさかではなからう。用意されたお茶を横目で見つ、娘たちを観察していれば、恥じらいつつも要領よく動くさまが目に残る。なるほど、有能な娘たちらしいと、茶をいただいていれば、隣に向かったらしい娘が、ドレスと鏡、くしなどを手に戻ってきた。というかよくそれだけ持てるものだ、と、感心していれば、何やらいじりたいらしいよからう、と、寛容な気分になって、頷けば、髪をくしけずられ結われ、化粧をしようともされたがそれは断固として断った。

さて、と、鏡を渡されて、うむうむと覗き見て、驚いた。

誰だこれは。

いや、確かに若いころの顔形によく似てはいるが、色が違う。黒髪茶色の眼、普通の日本人の色彩であったはずの容姿が、金色に薄紅がかった髪色に深い空色の瞳に変わっているではないか。若いころはこれでも美人であったのだよ。だからこそ、寄ってくる男どもにうんざりして徹底的に男性拒否するようになってしまったのだがな。茫然と眺めていれば、心配したかのように声がかかる。いやいかん、

これくらいのことでは動揺するとは修業が足りぬ、と、さすがにあとから考えれば動揺せぬ方がおかしいとわかるようなことを無理やり考えて、頷く。

勧められるままに、健康であるのに介助を受けながら湯を使い、着替え、髪を結えば、感嘆の声が上がった。いや、なんというか。飾る必要などないだろうに、と、深く眉間にしわを寄せれば、困ったようにおろおろ彷徨う娘たち。何ともやりづらい。とりあえず大仰に髪に飾られた花をはずし、いくらか地味に変える。ドレスは、まだまだ納得はいかないが一番地味なものを選んだのだから致し方あるまい。

こうして、着替えを終えたのち、食事らしい様子で別の部屋に案内される。……なんと面倒な事よ。しかし多少は融通するのもよからう。我を通すのは状況が見えてから、今はまだ少しばかりおとなしくしておいて損はなからう。案内されるままに向かったのは食堂らしき部屋、すでに席には先だつての王らしき男とその側近らしき男、神職のような男が座っており、周囲には人が控えている。こんな人の多い中で飯を食えというのか、と、不快を顔にあらわにしつつも、進められてしぶしぶと席に着く。

「××……×××……？」

わからんというとるに。

とにかく食事だ、と、手を合わせ小さくいただきますとそれだけはきちんと告げると、3又のフォークのようなものを使い、切り分けられた料理をいただいていく。正直脂っこい、というか、味が無駄に濃い。年よりの常で塩気の多いものを好んではきたが、これはあんまりだ。眉を寄せていくらか食べられそうなものをつまんで食事

を終えれば、じつと向けられる多くの眼があつた。

何ぞ文句でもあるのか、と睨み付ければ、伝わったのか首を振る。

食事の途中で席を立つのはあまり行儀のよろしい行為ではなからうが、これ以上は不要であつたゆえに、そこで再び手を合わせ席を立つ。なにやらほにやほにやと言っていたが、引き止めているような気配ではあつたが、知ったことか。微妙に注がれる視線に熱がこもつてゐるのに気づかないとでも思ふたか。そんな視線の中に長くいる筋合も趣味もない。さつさと部屋へと引き上げるに限るのだ。

部屋に戻ったら、再び湯あみし薄物の夜着に着替え、娘たちはてきぱきと働いて寢室へ案内すると一礼して扉を閉め去って行つた。

はてさて。

思わず扉を睨む。いやな予感しかせぬのはなぜだろうね。周囲を見渡せば、動かせそうな家具がいくつあつたため、サイドボードのようなものと、椅子、その他もろもろを扉の前へ移動し、封鎖する。これでよからう、と、安心してベッドに向かう。やれやれ、天蓋つきの寝台など、若い娘の夢物語だけの話だとおもっていたのだが。妙にふかふかとして柔らかすぎる寝台へと身を横たえつつ、腰を痛めねばいいかと、そんなことを考えながら眠りについた。

目が覚めると、朝方だった。

「おはようございます」

何故に居る。

目の前でにこやかに微笑む自称神を半眼で睨みつつ、礼儀として薄物しかつけてない身をシーツにくるむ。

とたんに脂下がる自称神。この変態が。

「いえ、僕のために恥ずかしがる貴女が、とても愛しく思えるんです。」

恥ずかしがった覚えなぞ微塵もないのだが、どうやら相変わらず脳内お花畑満載のようだ。

「しかしながら、夜を無事に超えられたようで、さすが聖女と見込んだ方だ。夜中にあちら様もだいぶ頑張ったようですが、突破はなかったようで」

言われてみれば、扉の前に積んでた家具がいくつか動いている。どうやら力づくで突破しようとした様子であるが、それだけのことをしたのならば、大きな音もしただろうに、そんな記憶はとんとなし。

「それはもちろん、ぐっすり休めるように、調整と守護をかけさせていた দিয়েましたから」

語尾にハートマークが付きそうな勢いで言われる。もうかえれ、貴様。

「酷いな、こんなに愛しているのに」

ぞぞぞと、背筋に悪寒が走る。外の男どもよりこいつの方が危険な

のじゃないのか、と、身を引けば、輝かんばかりの笑顔で、自称神が微笑む。

「いやだな、この感情は、もともとはあなたのものですよ。あなたが長い人生の間で捨ててきた愛する気持ちと恋する感情のすべてを、私が受け取ったのです。貴方が捨てた物の再利用、つまりエコなんですよ。……まあ、少々受け取りきれずにあふれて、この世界の人々に影響を与えまくってしまってるようですね」と

最後の方はかなり不穏だった気がするのだが、と、眉間にしわを寄せれば、そつと近寄るように、まるでどこぞのジゴロか女衞のような甘ったるい仕草で自称神が指を触れる。即振り払う。きもち悪いというに。

しかしながら、なんということだ。今までの人生ほぼ80年、そのうち70年少しの間、まともに愛だの恋だのと縁がない生活をしてきたのだが、その弊害がこんな形で来るとは。ありえん、と思う気持ちと、自業自得かと思う気持ちのはざまで揺れ動く中、現実逃避するかのように、そういえばなぜこの自称神とやらは、神の癖にやたら人間臭い、しかも変態くさい行動をとるのであるうか、という疑問がぼん、と浮かぶ。もしや、人間観察でもして練習しおったか、それともそういう変態神なのだろうか。

「いえ、いつの間にか習得していたんですよ。」

今更のように言うのもなんだが、人の思考を読んで返事をするのは、楽と言えば楽だが変態以外の何物でもないと思うのだが。それに習得とは、もっとましなものを習得できなかったのだろうか。

頭痛を覚えて額を抑えれば、なだめるように髪をささっと触れて、男の手が離れていく。振り払われると学習したからか、かなり素早

い。やるではないか。睨みあげれば、うつとりと見つめ返された。

「つまり、そういう理由で、聖女たる貴方へ皆様愛を注ぐわけです。どうぞ、今まで足りなかった分を受け取りつつ、清らかなまま頑張ってください」

さりげなくハードルを上げられた気がするのは、気のせいであろうか。

というか、この世界で聖女として何をすればいいというのか。いまだ説明がないままなのだが、と、思っで見つめれば、にっこりとほ笑んだ自称神が、扉に手のひらを向ける。とたん、積み重なっていた家具が撤去され、扉が開く。

「そろそろ侍女たちが来る時間でしょう。またしばらくしたら伺いますね」

「またんか、この変態」

「引き止めてくださるのはうれしいですが、それはまた次の機会に」
そついうと自称神こと変態は、再び淡く光の中に消えていった。

さてはて、どうしたものやら。
なにやらとんでもない状況下におかれているらしいわが身を思いつつ、遠くからもにもよとこちらを読んでいるらしき声を聴きながら、頭を抱えるのだった。

4・心配しないで下さい、貴女に黙って消えたりはしません。

人間というものは、慣れる生き物である。言葉が通じなくとも文化や習慣が異なっていようと、意外となんとかなるものなのだ。現に、日がたつにつれて世話をする娘たちも世話することに慣れたようであり、言葉が通じなくともある程度は融通が利くようになってきた。人間というものは図太いものである。どんな状況であろうともなじむものなのだ。いやおそらく、自分自身の神経が図太いだけではないと思いたいところである。

この世界に飛ばされて、ひと月がたった。その間、言葉が通じないなりに娘らに世話をされ、騎士らしきものどもに警護され、王らしきものやその側近らしきものどもと食事をし、神職らしきものに何やら話しかけられるが一切何もわからないのでスルーし、夜は何やら怪しげな様子ではあるけれどもそれらを退け、異世界にいるにも関わらず平和に、さらに言えば聖女といわれながらも何をしていいやらわからぬまま、説明がないのであれば知ったことではないと、太平楽に生活を送っていた。これでいいのか、と言われると多少困るが、しかしながらこちらが好きでここに來たわけでなし、説明させようにもあの怪しげな自称神はあれから姿を現すこともなく、首位の人間とは多少身振りで意思疎通はできるようになったが言語に關しては全く聞き取れないがゆえに覚えることもできず、手っ取り早く体液を交換しようと図ってくる輩どもは、自称神がよこしたのか何やら怪しげな力で撃退しつつ、過ごしてきた。

平和なのはよいことのはずなのだが、そろそろなんというか、尻のすわりが悪い。働かざる者食うべからずで生きてきたせいもあるであろうが、正直に言ってしまうならば飽きてきた、というのが本音であろう。

そう感じるまでにひと月ほどかかっているあたりどうなのかと
思わないこともないではないが、平和であると感じているのは恐らく自
分だけ、周囲はどうもそうではないらしい。人とかかわらないで生
きてきた、とはいえ、人の感情の機微を感じ取れぬわけではない。
それらを無視して生きてきた部分もあるが、感じ取れねば身は守れ
ぬ。この世界へきてひと月、どうやら、この国の上層部らしき男た
ちの間に、焦りと苛立ちがたまり始めているように見て取れた。

やれやれ、面倒事は嫌いなのだがね。

嫌いだといったところで面倒事の方が避けてくれるわけなぞあるわ
けもなく、理由が解れば避けようもあるうが、言葉が通じなければ
細かなところまではわかることもできず、まあ、おおよそは体液の
交換ができていないあたりに要因がありそうなのだが、それがこの
身をどうにかしたいという理由だけには思えず、言葉を通じさせたい
だけにしては苛立ち具合が強いようであり、とどのつまり全くど
うしようもない状態で、なるようになれと過ごしていた。

そして、その時はきた。来るであろうな、とは思っていたが、どの
ような形であるかはさすがにわからず、想像はしたものそれだけ
はなかるうと思っていた手段で、きた。

目覚めて朝食のために呼ばれた席で、騎士に囲まれた。ついでに、
なぜか傍付きの娘たちも、騎士に囲まれ剣を向けられている。目の
前には王、その側近、神職らしき男たちが、どこか得意げに、満足
げな顔をしてこちらをみている。どうやら、この娘たちは人質らし
い。私一人であれば取り押さえられぬが、娘たちを抑えればよかろ
うとおもったか。深くため息が漏れる。やれやれ、こういう方
向もあるうと思っただけだが、まさか本当にこの手段をとってくる

とは、なんともはや、だ。

そんなこちらの様子に、主導権をとれたと思ったか、男たちがジワリと輪を狭める。さて、どうしたものか。娘たちなどしらぬと放置するもたやすいのだが、いい加減わけのわからぬ状況にあるのも飽きてきている。何をなすべきなのかどうしたいのか、そのあたりが解らぬままではどうしようもない。

思案することしばし、やがて男どもの中から王らしき男が、目の前にたつ。なんだその脂下がった顔は。眉間に深く皺が寄る。全く、おそらく美形と言われる顔なのであるうが、あいにく西洋人風の顔の区別は全くつかぬ。きらきらしい髪色にきらきらしい目の色であるな、という程度なのだ。目の前で男は脂下がった顔のまま、鼻息荒く何事かを宣言している。だからわからんというに。

周囲が見つめる中、王らしき人は手を伸ばし、こちらを抱き込んでくる。ぞわぞわと嫌悪が背筋を走る。振り払おうと力を込めるが、なぜか振り払えぬ。今までは振り払えていたはずではないか、と、焦るが、その焦りすらどこか楽しむ風情の男は、満足げにこちらの頬を撫でると、何事かをもしょもしょとつぶやいて、顔を寄せてくるではないか

なんということだ。このままでは危険すぎる、と、とっさに足を振り上げる。

「……………」

衝撃に悶絶し、力が緩んだすきに体を離す。どうやら見事に当たったようだ。狙うは急所、これは基本である。何とかのがれて、周囲が騒然とするうちに距離を取る。しかし、こんな時こそ、あの自称神は姿を現すべきであろうに、ひとつき、姿を現さぬままでもあることから、何事かあったのだろうか、それとも、神はやはり自称にすぎず幽霊であつたのではないだろうか。幽霊であるからには、消えてしまった可能性もある。なんともはや、この状態で放置して消

えるとは、とんでもないやつだ。

「心配しないで下さい、貴女に黙って消えたりはしません。」

気が付けば、後ろから包むように抱き込まれていた。振り払おうとして、今の状況に思い当りとりあえず耐える。しかし、心配していた覚えはない。幽霊ならば消えたのではなからうかと考えただけである。むしろキエロ、と、思えば、こちらの顔を覗き込みながら自称神が微笑む。

「相変わらずの天邪鬼ですね。ツンデレ、っていうんですっけ？
奥が深いですね」

天邪鬼になった覚えもなければ、そんな奇天烈な生き物になった覚えもない。それでも、それでも、助けられたことに一応の感謝を覚えなくもないので、そのまま耐える。

「あなたに求められるまで、と思ったら、本当に思い出してくださいらないんですから。いけずな人ですね」

言われてみれば、このひと月、この時までともに思い出しもしなかったことに思い当る。思い出す必要もそこまでなかったとおもわれる。

「まあいいでしょう、こうして思い出してくださいのですから。
——さて、お仕置き時間ですね」

そういうと自称神の気配が、一気に変わる。殺気、に近いだろうか、けれどもっと澄んでいる。いくなれば、荘厳なる神社の気配がもっと研ぎ澄まされ突き刺さるほどになったような感覚と言えば近いか

もしれない。今までとは違う意味でぞくりと背筋を震わせれば、目の前の騎士たちがばたたと倒れていく。地面に押しつぶされるように這いつくばる男たちの中、最後までたっているのは王・側近・神職らしき男の3人だった。その3人も青ざめながら、体をがたがたと震わせ、必死の形相である。

「ご存知ですか。この者たちは、あなたの乙女の証を手に入ればこの国が救われると思い込んでいたのですよ」

自称神がずっと手を伸ばせた、耐えきれなかったように男たちが崩れ落ちる。それでも膝立ちで耐える男たちに、自称神は低く笑って面白そうに眼を眇めた。

「あなたを愛するあまりと、伝承の間違い、それが相まつてのことでしょうが……愚かですね」

ひとつ突っ込んでもいいだろうか。それは、そもそも、自称神、いや、お前さんが、訂正を入れるかもしれない、何やらあふれたらしき愛なるものを溢れさせなければよかったのではないのだろうか？　そもそも、それがなければ問題なかったのではないのだろうか。溢れるのが仕方がなかったのなら、こうして顕現できるのであれば伝承が間違っている旨を伝えればよかったのではなからうか。なぜ、それをしなかったというのか。

自称神は、男どもに向けていた目をこちらに向けると、それまで鋭かった目をとろりととろけさせ、ゆるりと笑みを浮かべた。

「いやですね、そんなこと。理由ですか？　その方が面白いからです」

……結局諸悪の根源はお前ではないか。

半眼で睨めば、自称神は頬を染め身悶える。なんだそれは、もう決められた行動なのか、と、諦めたように深いため息を漏らせば、自称神の手がするところこちらの体を撫でさする。その動きの気持ち悪さにさすがに振り払い身を引けば、うつとりとその撫でていた手を見つめる姿があつて、ぞぞぞ、と体が震えた。

「すみません、人類の造形美に思いをはせていたところです」

きもち悪い以外に何を言えいいのかもう分らぬ。

相変わらずのこちらの蔑視の視線に堪えることもなく、自称神は輝かしい笑みをこちらに向け、そして、宣言した。

「さあ、そろそろはつきりさせましょうか。——お遊びが過ぎました」

部屋の中には、床に這いつくばる騎士たち、倒れ伏し気を失った娘たち、膝立ちで必死に苦痛に耐える王たちの姿と、その中で優雅に立っている自称神の姿、微かに聞こえるうめき声以外は何もないその部屋に、その声は低く、響き渡ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0356z/>

Training Box

2011年12月19日10時53分発行